
とある仲良しの日常

Dom

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある仲良しの日常

【Nコード】

N1346BA

【作者名】

Dom

【あらすじ】

——学園都市。そこに仲の良い5人がいた。

上条当麻。

一方通行。

食蜂操祈。

土御門元春。

周大和。

そんな5人のほのぼのとした日常を書いていこうと思います。

ほのぼをメインとしていこうと思います。
オリキャラは1人入れました。

はじめに読んでください

初心者なのでミスが目立つかもしれませんが。
もし見つけた場合、感想に場所を書いていただくとすぐに修正をいれます。

読む前にチェックです

- 1, 登場するキャラクターが原作と違う性格を持つから嫌だ
- 2, オリキャラは受け付けられない
- 3, 人間関係が原作と同じじゃないから嫌だ
- 4, 上条が原作とは違う力を持ってるから嫌だ

以上の4つに当てはまる人は見ないほうがいいかもしれません。

科学側オンリーなので魔術側を出演させません
時間軸は原作に沿って進めますが、魔術側が関係しているところはすっぱします

登場人物について

上条がもう1つ力を持っていることにしました。

戦闘のシーンを簡単に切り抜けれるようにしたかったのでそうしました

とりあえず主人公だけでも：

1. 上条 当麻

かみじょうとうま

とある高校に通っている高校1年生。右腕には【異能】の力なら大小問わず打ち消してしまう「幻想殺し」イマジンプレイカーを持っている。

幻想殺しは彼の中に秘められているもう1つの力を抑えるためになって、他人の力を打ち消すのはついでのようなものである。

幻想殺しの力を解除している間のみ今まで打ち消してきた他人の力を自分のものとして扱うことができる。

解除したときのデメリットは異常なまでにお腹が減ってしまうことである。なので彼は極力その力を使わないため、体術を小さい頃から学んでいた。よって今ではスキルアウト10人に囲まれても幻想殺しと自分が極めた体術で敵を全員気絶させ、その場を突破することができるようになっている

2. 周 大和

しゅうやまと

オリキャラ。彼の能力は「座標補足」ポイントキャッチレベル5の第6位。

座標を求めて、その座標に【何か】をするのが彼の能力。

何か：というのは曖昧だが補足した座標に攻撃をする場合「炎」を使ったり「電撃」を使ったりどんな方法でも攻撃することが可能で

ある。

相手の攻撃を曲げることも可能である（体の動きは不可能）なので一方通行より強いが、上条には勝てない。

ただ、能力測定的时候は彼の能力で一番使いやすい「空間移動」の能力で受けているため、

表向きではレベル4の空間移動能力者^{テレポーター}になっている。

彼がレベル5と知っているのは統括理事会と上条達だけである

3. 一方通行^{アクセラレータ}

いいやつ。めっちゃくちゃいいやつ。

ベクトル操作を持つ学園都市最強の男。だが上条と周には勝てない。上条の手を借りて、一人も妹達を殺さずに実験を中止に追いやった。

4. 食蜂^{しよくほう} 操析^{みさき}

一度、能力が暴走していたときに上条に助けられた。

結果、惚れてしまった。

いつもいつも上条にひつついている。上条の周りの奴らは呆れ気味でその風景を見ている。

むやみに能力を使わないいい子：のはず。

5. 土御門^{つちみかど} 元春^{もとはる}

魔術師。レベル0の「肉体再生」を持つ男。

いつも上条達に振り回されている。

彼らのいつメンのうちの一人

はじめに読んでください（後書き）

ほとんどの人が少しだけキャラ崩壊をしています。
それを踏まえて読んでください

8月25日(木) (前書き)

では始めます

8月25日（木）

— 8月25日

— 学園都市とある病院の一室

そこには白髪で赤色の瞳をもつ少年が親友が訪れてくるのを待っていた…

コンコン

?? アクセラレータ 「一方通行…入ってもいいか？」

一方通行 「あア…構わねエ」

?? 「元気してたかよ親友」

声のした方にはワックスで固めたであろうツンツン頭が特徴的な少年が立っていた。

一方通行「体はお前のせいで傷だらけだが、精神的には問題ねエ…
アリガトな当麻」

上条「いいってあんな実験潰したほうがいいに決まってる」

あんな実験とは、一方通行が妹達と呼ばれるクローンを2万回殺す
ことで絶対能力者^{レベル6}に成れる…という内容の実験である。

一方通行「まア…潰すために結構痛い思いしたが、それであいつら
が死なねェんだったら問題ねェよ」

上条「あの時は手加減したらいけないと思ってき…ん？」

廊下を全力で走っているであろう音が聞こえて、上条と一方通行は
話を止めた。

ドアが乱暴に開けられ、病室に陽気な声が聞こえてきた。

??「上や〜ん！元氣してたぜよ〜？」

??「おいおい土御門…それは一方通行に言う言葉じゃねーのか？」

土御門「いやーつついっくセで上やんに言ってしまったぜよ」

上条「土御門に大和！お前らもお見舞いか？」

病室に入ってきたのは土御門元春と、周大和しゅうやまとの二人であつた。

大和「ま、そんなところかな？」

土御門「まさかほんとに実験を中止に持っていくとはにゃー…ほんとに上やんはすごいぜよ」

大和「そのせいで一方通行はボロボロだけだな」ニヤニヤ

一方通行「てめエ…何笑ってやがる！」

大和「おいおい…ここは病院だぜ？暴れんなよ一方通行」

一方通行「暴れる気はねエよ」

上条「それよりさ、いつ退院するんだ？」

一方通行「あと2日ぐらいかア？カエル顔はそう言った気がするがなア」

そこへ冥土返しと呼ばれる医者が入ってくる
ヘブンキャンセラー

冥土「だれがカエルだって？」

大和「先生！」

冥土「彼、明日には退院できそうだね」

上条「お！退院したらみんなでパーティーと飯でも食いにいくか！」

土大一「「いいね（エ）賛成だ（にゃー）」」

そうこうしている間に完全下校時間が近づいてきた。

上条「んじやあ俺たちは帰るな」

一方通行「あアまたな」

大和「バイビ〜一方通行」

土御門「しっかり寝るぜよ〜？」

一方通行「ふん…うるせエ」

上条「予定はメールで教えるからな〜」

一方通行「ほんとに当麻には世話になりっぱなしだよなア」

冥土「彼はほんとに面白いことを考えるね」

冥土「君を全力で叩き潰すことによって【上】に「一方通行は実はレベル0にも負けるほど弱いんだ」って思わせる。それで実験を止める…ね」

一方通行「まア、いつ戦ってもあいつには勝てねエからな」

少しの間病室は静かになった。

突然冥土返しはこんなことを言い始めた。

冥土「いくらクローンと言っても彼女たちは「人間」だからね？だから死んでいいなんて思っではいけないんだよ」

一方通行「一人も殺す気はねエし、一人も死んでねエ…それもあいつが頑張ったからだろうなア」

冥土「もし…もしもだよ？再び妹達がつくられ始めたら…君はどう

するつもりだい？」

一方通行「答えはひとつだア：研究所を塵も残さず消す。ンでもって妹達を保護してこの病院に連れ帰る。」

冥土「二つ答えを言ってるような気がするんだけどね」

そう言って冥土返しは病室から出るためドアに手をかける

冥土「それとね一方通行」

一方通行「なんだ？」

冥土「病院はホテルじゃないからね？」

そう言い残して冥土返しは病室から出ていった。
彼が病室から出た直後一方通行は眠りについた……

―帰り道

土御門「予想以上に元気でなによりぜよ」

上条「だな」

大和「その通りだ…ぜ…？」

土御門「どうしたんだにゃー？」

大和「直感だけだよ…そこを右に曲がったら操析が居そうなんだけど」

土御門「ははは、そんなわk「当麻さん！」…あったぜよ」

声がした方向から、常盤台中学の制服を身に付けた美少女が3人の元へ走ってくる

上条「おう！今日も元気だな操析！」

食蜂「当麻さんこそ元気で何よりです」

食蜂^{しょくほうみさぎ} 操析^{そうし}：彼女は以前能力が暴走して人への読心術がフルでオープンになってしまい、ずっと他人の心の声が聞こえ続けて苦しんでいたところを上条の幻想殺しによって助けられている。

それ以来上条に惚れてしまい、ずっと一緒にいるのである。

ちなみに、惚れた時から毎日のように、上条に告白しているが毎回彼に振られている。

それでも諦めることなくずっと一緒にいるのである。

大和「操析は一方通行の見舞い行ってあげたか？」

食蜂「え…一方通行さん入院してたんですか!？」

彼らは一方通行の入院した理由を全て話した。

食蜂「そうだったんですか…」

大和「ま、こいつが一方通行をブン殴って実験を終わらせたんだけどな」

土御門「上やんのパンチは痛いぜよ…一方通行よく耐えれたにゃー…」

上条「それで、明日一方通行が退院するからどこかでパーっと祝ってやろうかな…なんて考えてんだけど…操析はどうする?」

食蜂「行きます!みんなで祝ってあげましょう!もちろん私の席は当麻さんの隣ですよ!異論は認めません!」キラキラ

土御門「目が輝いてるぜよ…」

上条「んじゃ、後で皆にメールで予定を教えるな」

食土大 「了解！」

上条「それじゃ、また後でな」

4人が自分の住んでいる寮へ帰っていく。
食蜂だけ寮が違ふのだが：

食蜂「なぜだアアアアアアアアアアアア！……！」グオオ
オオオオオオオオ

常盤台生徒 「!？」
ビクッ

— 家

上条当麻は悩んでいた。

上条「明日退院だろ？ だったら明後日のほうがいいんじゃないか？
いや…でも明日でもいいしなあ…」

— 10分後 —

上条「明後日でもいいだろ…」 ハア

TO土御門

TO大和

TO操析

T O 一方通行

本文

よう

退院祝いのことなんだけど

明後日にしようと思う。

18時30分に俺たちの寮の前で

集合でいいか？

それと、ミサキチは寮の門限とか

大丈夫なのか？

――1分後――

P i r r r

上条「いや、早すぎだろ」パカッ

F r o m 操祈

門限は大丈夫です！

それと、当麻さんが決めたことに
反論するつもりはありません！

P・S 必ず私の隣に座って下さいね？

上条「いやいやどんだけ必死なんだよ…可愛い奴め」ニヤニヤ

その後、土御門、一方通行、大和の順番でメールが届いた。

彼らも上条が立てた案に反対は無いそうだ。

そして、もっと詳しく予定を立てたあと全員にメールで内容をもう
1度送った。

上条「うっし！風呂に入って、寝るとすっかね」

8月25日(木) (後書き)

完璧なほのぼの空間をつくるのって苦勞しますね。

食蜂の話の方がよくわからないので自己流でいきます

8月26日(金) (前書き)

前回、登場キャラクターは一通り全員出しました。
これ以上増えたら書くのが難しくなりますかね？

今日は周をメインにやっています

8月26日(金)

— 8月26日

周大和は11時まで寝てしまっていた。

大和「ん…？ 11時か…寝すぎたな」

身支度を済ませると昼食を食べに外へ出かける準備をしていた。
ちなみに一方通行が退院するのは夕方。

上条は補修。

土御門は…義妹と遊んでると思う。

ミサキチは…別にいいや

大和「一人かよ…」

ぶつぶつ独り言を言いながら寮を出て、レストランへ向かった…

大和「おいおい…ありゃランチってやつか？ しょーがねえ助けてや
っか」

路地裏を見る彼の視線の先には10人ぐらいの不良達に囲まれてピンク色の髪の毛でツインテールの常盤台の女の子がビルの壁に押し付けられている瞬間が映っていた。

大和「うっし！ いっちょやりますか！」 シュンッ

不良A「うわッ！ なんだこいつ！？」

不良B「テレポーターか…？」

大和「はいはい、そこまでそこまで。その子を放してやりな」

不良C「うっせーなあ…部外者はだまってる」

大和「日本語がわかんねーのか？ 話せって言ってるんだよ！」

不良B「ああ！？ 誰に向かって口聞いてやがる！ てめえらやつちまえ！」

—1分後—

不良達 「」「」「」「」「すいませんでしたッ！」「」「」「」
「」ボロボロ

大和 「……さっさと失せろ」

?? 「助けてくださってありがとうございますの。何かお礼をした
いのですが…」

大和 「いいって！困ってたらお互い様って言うだろ？」

?? 「少しでも恩をかえさせてくださいまし！」

大和 「うーん…そこまで言うならお願いしようかな！ところで君の
名前は？」

?? 「わたくしの名前は白井黒子と申しますの」

大和 「んじゃ黒子…昼飯奢ってくんない？」

黒子「（んなぁ！？この殿方…いきなり名前で呼んでくるんですの！？）」アセアセ

大和「おーい…黒子さーん？」

黒子「ゴホン…で、ではお昼ご飯でよろしいのですね？」

大和「できればね…無理ならクレープとかで済ますけど…」

黒子「結局食べ物なんですのね…こちらもお話したいことがあるのでお昼ご飯と一緒に食べに行きましょう。」

大和は、白井黒子と名乗る常盤台の学生と共に昼食を食べることになった。

まさかこの後自分に弟子入りたいと名乗ってくる人がいることなど予想もしていなかった。

レストランについた二人は改めて自己紹介をしていた。

黒子「やはり周さんは空間移動能力者でしたのね」

大和「あああ………そうだよ。あと、俺のことは大和でいい」

黒子「了解ですの」

大和「それとさ黒子ちゃん…なんでさっきは能力を使っってなかったの？」

黒子「あの不良たちに囲まれてた学生を逃がして、彼らを捕まえようとしたんですの。そしたら不意を突かれて頭を攻撃されまして…」

大和「その衝撃で空間移動が出来なくなった…と…？」

黒子「恥ずかしながら……そうですの」

大和「空間移動は精密な計算が必要だからな…頭攻撃されちゃ使えなくなるのもおかしくないしね」

黒子「わたくしの不注意で大和さんまで巻き込んでしまっ…申し訳ないですの」

二人の間に謎の沈黙が現れる…
先に口を開いたのは白井の方だった。

黒子「失礼ですが、大和さんは能力の限界値はいくらですか？」

大和「えーつとね…（やっぱーよ限界値？覚えてーよんなもん…テキトーに答えるか）」

彼は空間移動の能力検査を受けているが、空間移動が自分の能力でないため限界値など覚えていないのだ

大和「たしか…距離は1kmで、最大で5tぐらいなら飛ばせるな（あれ？これじゃあ霧ヶ丘の座標移動よりすごくないか？）」

黒子「す…凄すぎですの。わたくしなんか80mしか飛ばせない上、130kgが限界ですのに…」

大和「そ…そう落ち込むなって！」アセアセ

黒子「申し訳ありませんの…」

そうこう言ってる間に頼んだ品が届いた。

大和「いっただっきまーっす！」

黒子「いただきますの〜」

無事、昼食も食べ終わり二人は外へ出ていた。
そこで白井黒子はあるお願いを周にするのであった。

黒子「や…大和さん！わたくしを弟子にしてくださいだけでしょ
うか！？」

大和「いきなりどうしたの！？」

黒子「いえ…大和さんに教えて頂いたらもっと強くなれると思いま
して…」

大和「……………強くなりたい理由を教えてくださいませんか？」

黒子「わたくし、風紀委員に所属していますの。そこにいる私の相棒は情報処理においては右に出るものは居ないほどすごいのですが、戦闘能力では小学生にも負けてしまうほど弱いんですの」

大和「で…その子を守るために強くなりたいと？」

黒子「ええ…その子を…初春を…守りたいんですの！」

大和「守りたい…ね…いいぜ！弟子ってのにしてあげよう」ニカッ

黒子「あ…ありがとうございますの！」

そして二人は携帯番号とメールアドレスを交換した。

白井黒子は風紀委員の仕事が入ったとかで、急いで支部へ向かっていった。

そして周大和に弟子が出来た。

大和「つか何教えればいいわけ!？」アセアセ

大和「一方通行に模擬戦でもやらせるか」ニヤニヤ

大和「アイツ相手じゃ攻撃当たらねーしなあ…上条が最適かな?」

いろいろなことを考えながら歩いていく周。
そんな彼の目にある風景が飛び込んできた。

大和「今日の俺は不幸なのかな?」

大和「銀行のシャッターが降りている…」

つまり銀行強盗でも起きたのであろう。
彼はすぐに行動を始めた。

大和「つってもどーっすかなー…とりあえず裏口でも探してそこから入るか…?」

だが、彼はそこで考えを変えた。

大和「俺が裏に回ってる間に中の人が怪我したらどうするんだ…シッター壊すか…」

空間移動して建物の中に入る案もあったが、飛んだところに人がいたら大変なことになるのでシッターを壊すことにしたのである。

大和「計算終了…溶けろッ!」

大和の手から灼熱の炎が生み出される
炎はシッターを溶かし、穴を作る

強盗A「な、誰だてめえ!」

強盗は2人。片方が体から電撃を出しているので片方は発電能力者であることがわかる。

強盗B「感電しなくなったらそこを動くな！」

大和「動くなって言われると動きたくないんだよね」ニヤニヤ

大和が強盗に近づこうとした瞬間電撃が飛んできた。

大和「じゃましないでくれない？」

大和が右腕を振ると電撃が大和の右後ろへ方向転換し、飛んできた。

強盗B「な…曲げただど!?俺はレベル3だぞ!?何をした!!」

大和「何をしたって言われると…曲げました」キツパリ

強盗A「ふざけやがって…燃えて消えろ!!」

強盗の手のひらから炎の塊が飛んでくる

大和「だゝかゝらゝ当たらないって…」

大和が右腕を炎に向けると、炎はまるで動きが止まったかのように

空中で静止した。

強盗A「何！？何をしたあ！！」

大和「お前ら二人の計算式を逆算して、攻撃対象の座標を俺の任意の場所に移動させてもらったただけですぜ」

強盗B「は…はあ！？そんなこと出来るわけねーだろ！」

大和「うっせーな…もうそろそろ風紀委員が来る。それまで寝てもらうぜ！」ダッ

大和は強盗2人にパンチを浴びさせ気絶させた。

大和「上条直伝のパンチだ…30分ぐらいで目は覚めるとおもうぜ？」

大和はすぐさま強盗2人を拘束して、風紀委員の到着を待っていた。そんな彼に先ほど弟子入りした少女の声が届く。

黒子「師匠！こんなところで何をなさってるんですの？」

大和「ん？黒子か…そっか、ここはお前の支部の管轄なんだな」

黒子「はい…もしかしてあの2人が強盗ですよ？」

大和は強盗事件で起きたこと全てを話した…。

黒子「はあ…そうでしたの…」

大和「まあそんなとこかな？俺、用事あるから帰っていいか？」

黒子「ええ…構いませんの。あと、今度時間が出来たら風紀委員177支部に来ていただけませんか？」

大和「別にいいけど…俺捕まるようなことしたっけ？」

黒子「いえ、わたくしに師匠が出来たと仲間に伝えると是非1度でいいから見てみたいと言っていますの…」

大和「そんなことか…別にいいけど、2学期始まってからでいいか？」

黒子「構いませんの！ではよろしくお願いしますわ」

白井は2学期に特訓を受けさせて欲しいと大和に頼むと銀行の中へ入っていった。

大和はそれを見届けるとある場所へ向かっていった。

コンコン

大和「はいるぞー」ガラガラ

一方通行「どうしたア…こんな昼間っから暇なのかア？」

大和「さっきまで壮大なスケジュールだったんだぜ？」

一方通行「何かあったのかア？」

大和「いやあ：銀行強盗を懲らしめてきた！」

一方通行「お前に当麻の不幸が移ったんじゃないの？」

大和「それはそれは：困りましたな」

彼らが話初めて二時間が経過したころ冥土返しが部屋に入ってきた。

冥土「もうそろそろ出ていっても大丈夫だね」

大和「うっし！じゃあ荷物運んでやるよ」

一方通行「ン」

二人は荷物を抱え部屋から出ていった。

大和「荷物少なくてね？」

一方通行「もう寮に送ったからなァ…」

大和「そっか！準備がいいなお前は…」

日も暮れかかっている学園都市の道を二人のレベル5が歩いていく。

大和「明日、楽しみだな！」

一方通行「あァ」

8月26日(金) (後書き)

一方通行の話し方って案外打ち込むの疲れますね…

未だに食蜂の話し方を安定させるのが難しいんですよ

8月27日(土) (前書き)

前はちよつとだけバトルがおきましたが、無事終えることができませんでした。

8月27日(土)

——8月27日

上条たちが住んでいる寮の玄関先に男が4人立っていた。

大和「今日は皆に合わせたい奴がいるんだ…」

上条「合わせたい人？」

大和「ああ…昨日路地裏で助けた子なんだけど、その子空間移動能力者だったのさ」

一方通行「ヘエ……ンでお前の能力見て、弟子にしてくださいとか言ってきたオチか？」

大和「大正解！さすが第一位の頭脳だ」

土御門「弟子…？弟子…？弟子…？にゃ…にゃー」

上条「土御門が壊れた!」

4人が遊んでいる時、弟子は現れた。

黒子「初めまして。常盤台の白井黒子と申しますの。よろしく願いますの」

大和「えーっと左かr「んじゃまず俺から!」…よろしく」

上条「俺は上条当麻!能力は…能力は…無いってことにしておいてくれ」

土御門「俺は土御門元春。土御門って呼んでくれにゃーちなみに天下のレベル0ですたい」

一方通行「一方通行。能力はベクトル操作。序列は第1位だ」

黒子「第1位様ですよ!?!」ビックリ

一方通行「序列で呼ぶんじゃないぞ?」

黒子「わかりましたの」

自己紹介も無事終わり、あとは彼女を待つだけになった。
そこへ1通のメールが届く

F r o m 操 祈

本文

当麻さん！申し訳ありません。
少し遅れそうなので先にお店に
行っておいて下さい。

P・S 隣の席は必ず開けておいて
くださいね！

黒子「この方は…ご彼女か誰かですか？」

上条「いや、そんなんじゃないんだ」

一方通行「早く行くぞオ」

レストランについた一同は席についた。

今回は中華風レストランなので机は円の形になっている。

上条「俺の右側は開けておいてくれ。後でめんどくさいことになるから」

大和「だな」ニヤニヤ

土御門「その通りですたい」ニヤニヤ

一方通行「眠みィ」

黒子「了解ですの」

料理を頼んで、しばらくすると操祈がレストランに駆け込んできた。

食蜂「当麻さん！皆さん！遅れてすいません！…ん？常盤台の制服？」

上条「まだ飯は来てないから問題ないぜー」

黒子「な…な…なぜ心理掌握メンタルアウトがここに！？」

食蜂「あら…私はここに来てはいけないのかしら？」

黒子「い…いえ…決してそのようなことは…」

食蜂「そんなに怯えないでちょうだい」クスクス

大和「そっか操析は常盤台の2大エースだもんな」

食蜂「えーつとあなたの名前は…」チラッ

土御門「なんだにゃー？」

食蜂「白井黒子さんね？私は食蜂操祈。操祈でいいわ」

黒子「は…はい！よろしくお願いしますの」

握手をする2人。その傍らで白髪の子と茶髪の子が静かに話していた。

大和「今、土御門覗かれたな」ヒソヒソ

一方通行「あア…确实だなア…」ヒソヒソ

上条「こら！操祈！勝手に人の頭覗いちゃダメだろ！」プンプン

食蜂「あ…ご…ごめんなさい！嫌いにならないで！」

上条「今回は土御門だから別にいいけどほかの人だったら許さないからな！」

食蜂「ごめんなさい…」ウルウル

大和「聞いたかよ！土御門だから別にいいってよ」ヒソヒソ

一方通行「アッヒヤッヒヤッヒヤッヒヤ」ヒソヒソ

大一「……………！……………！」

笑いすぎて声が出ない2人。

その隣の席で黒子に慰められているアロハグラサン。

そうこうしている間に頼んでいた品が届いてきた。

上条「それでは！一方通行の退院を祝ってえええええええ……………乾杯！……………！」

一同「……………乾杯！……………」

——中華料理店内

上条「この料理美味しい！」モグモグ

土御門「中華なんて久しぶりだにゃー」モグモグ

大和「この餃子上手い！」ギュオンギュオン

食蜂「いやいや、大和さん食べる音おかしくないですか？」パクパク

大和「俺がガン〇ムだ！」モグモグ

一方通行「最後の1個は俺がもら「させないぜよ！」おィ！」

黒子「（本当に仲が良いんですね）」パクパク

上条一行は夕食を食べ終え外に出ていた。

上条の腕に食蜂が抱きついてるのはいつものことである。

上条「んじゃーこちらへんでお開きとしますか!」

大和「そうだな…じゃあ皆また今度な」ノシ

食蜂「当麻さん! また呼んでくださいね!」ノシ

6人は男女に別れて自分たちの寮へ向かって歩きだしていく。
白井黒子は思い切って食蜂にこんなことを聞いてみた。

黒子「操析さんは上条さんのことを異常なまでに慕っているようですが、過去に何かあったんですの?」

食蜂「ええ…過去に1度能力が暴走してね、その時に当麻さんが助けてくださったの」

黒子「暴走しているレベル5を止めた?」ビツクリ

食蜂「あら?当麻さんの力を知らないの?」

黒子「力…?（そういえば自己紹介のとき能力を言おうとした時躊躇っていたような気がしますの）」

『能力は…能力は……無いってことにしておいてくれ』

黒子「（あの反応は一体…）」

食蜂「知らないんだったらいいの!」アセアセ

黒子「は…はあ…」

気がつく和白井の寮の目の前に着いていた
白井は食蜂に頭を下げると、寮の中へ入っていった。

食蜂 「(他人に力を教えると怒られますからね…)」

食蜂 「(私でも当麻さんの全力を知りませんし、あの力は一体…)」

そうこうしている間に自分の寮へ着いていた。

食蜂 「ただいま戻ってまいりましたわ」ガチャ

常盤台生徒 「」「女王! おかえりなさいませ」「」

彼女たちと別れたあと、4人はこんな話をしていた。

大和「つーかさ、もうそろそろ夏休みも終わりだぜ？宿題やったか！？」

上条「明日で全部終わるぜ！ちゃんとやっててよかったあゝ」

土御門「何い！？上やん宿題やってたのかにゃー！？？」

上条「見たいんだったら帰りに俺の部屋に来いよな」

土御門「残念ですたい。もう終わってるんだにゃー！！」

一方通行「宿題だア？そんな物もらってねえっつーの」シレッ

大和「うわぁ…セコイ…1位だからか！？俺だってレベル5だっつーの！」

一方通行「てめェが能力偽装してっからそオなるンだろオが」

大和「その通りでございます」orz

夏休み終了間際によく話される宿題の進捗の話をしていると、彼らは自分たちの寮に着いた。
そして、おやすみの挨拶をすると各自別々の部屋に帰っていった。

――2時間後…とある路地裏の出来事

?? 「でもさー結局水着って人に見せつけるのが目的な訳だから、誰もいないプライベートプールじゃ高いやつ買った意味がないって
いうか…」

?? 「でも市民プールや海水浴場は混んでて泳ぐスペースが超ありませんが」

?? 「んーたしかにそれもあるのよねー…■■■はどう思う？」

?? 「浮いて漂うスペースがあればどっちでもいいよ？」

?? 「はーいお仕事中にたべられない。新しい以来が来たわよ」

?? 「不明瞭な依頼だけど、ギョウは悪くないしやることは単純かな」

?? 「やることって？」

?? 「1週間以内に来るであろう侵略者からの施設防衛戦！」

8月27日(土) (後書き)

また、戦闘が始まるのですか…

また、戦闘が始まるのですね…

8月30日(火) (前書き)

あの3人が登場です！

8月30日(火)

午後4時

とある病院の前に上条当麻、食蜂操祈、一方通行、土御門元春、周大和の5人はいた。

上条「ほんとにいいのかよ一方通行：彼女たちにこいつらを合わせ
て」

一方通行「構わねエ：アイツらも会いたいわって言ってたしなア」

大和「確か：第3位のクローンだっけ？」

土御門「でもどうしていきなり会いたいわって言ってきたんだにゃー
？」

食蜂「おそらくですが、友達が：欲しいとかではないでしょうか？」

一方通行「精神操作系最強の操祈が言ってんだ：間違いはねエだろ」

大和「黒子が来れなくてほんとによかったぜ…」

食蜂「黒子は御坂さんのことを異常なまでに慕ってますからね」クスクス

一方通行「お前が言うなよ…」ハア

食蜂「なあ…あ、あの子は相手が女の子ですが…私はッ！」アセアセ

土御門「レズっ子もいける！ってやつがうちのクラスにいるぜよ」

大和「青ピか…あいつは意味がわかんねーしな」

そんな話をしていると彼女たちがいる病室にたどり着いた。

上条「おーいみんなで遊びに来たぞー」

く入っても大丈夫ですとミサカは即答します

一方通行「入るぞ」ガラガラ

一同「」「失礼しまーす」「」

上条「おう！久しぶりだな…元気にしてたか？」

00001「体の傷は癒えましたとミサカは現状報告します」

一方通行「そりゃよかったなア」

00002「そこで貴方がたに少し相談があるのですとミサカはあなたの顔をまっすぐに見つめながら心中を吐露します。」

上条「俺たちに？」

00001「はい。それとお話をするために少し外に出ましょうとミサカは貴方がたの腕を引っ張ります」

00001号に引っ張られ部屋の外に出ていく上条と一方通行。
そのころ部屋では…

土御門「いやーほんっとそっくりだにゃー」

大和「俺はオリジナルを見たことねーからわかんねーけどな」

食蜂「いや、本当にそっくりですよ？」

大和「ん？当麻達いねーじゃねーか…どこいったんだ？」

00002「それなら問題ありませんとミサカは横槍をいれます」

00003「いま00001号が彼らにお願いをしている最中だとミサカは簡潔に答えます」

土御門「何で00001号ちゃんをお願いしてるってわかるんだにゃー？」

00002「ミサカ達は発電能力を使って脳波をリンクさせることが出来るのですとミサカはあなたにヒントを出します」

食蜂「それでネットワークでも作ってるの？」

00003「はい、その通りですとミサカは答えを述べます」

大和「ほお…そりゃ便利だな」

土御門「今度かみやんと繋いで、テストをカンニングさせてみたいぜよ」

00002「それは出来ませんとミサカは即答します」

土御門「冗談だにゃー」

00003「!!…00001号の相談が終わったようですとミサカは皆さんにお伝えします」

00003号がしゃべり終わったと同時に上条と一方通行が部屋に入ってきた。

その後ろで00001号がとても幸せそうな顔をしていた。

一方通行「俺は店の方をどうにかしてくる。あとは頼んだぞ」

そう言い残して一方通行は部屋から再び出ていった。
その行動に疑問を持った彼らが質問してきた。

大和「店ってどーゆーことだ？」

土御門「俺も気になるにゃー」

上条は00001号と話したこと全て話した

食蜂「つまり、外を見てみたいと…」

土御門「まあ生まれた時からずっと施設の中にいたらそう思うのが普通だにゃー」

大和「でもよ、3人も超電磁砲がいたら店員びっくりするぜ？」

上条「大丈夫だ、店出るとき操析に店員全員の頭の中から妹達の記憶を消してもらうから」

大和「さすがレベル5…」

食蜂「いくらで借りる気なんでしょう？ 私たちも少しは出したほうがよさそうではありませんか？」

土御門「1位だから問題ないにゃー」

大和「でも移動はどうするんだよ？タクシー借りる訳にはいかねーしな…」

上条「え？俺と、大和。二人で飛ばせばいいじゃねーか」

大和「一番聞きたくない答えだぜ…」

P i r r r r

F r o m 一方通行

本文

店ごと借りることに成功した。
座標を転送するからすぐに飛んで来い
その場所には何も物は置いてないから
安心しやがれ

大和「んじゃ上条はミサカ達を頼む」 シュンツ

上条「それじゃ行くぞ？」

00001, 2, 3 「 「 「よろしくお願いしますとミサカは…」 「
シュンツ

——オリヤ・ポドリーダ店内

大和「とーちやく！」 シュンッ

土御門「スペイン料理のお店らしいぜよ」

食蜂「なんで当麻さんと一緒に飛ばしてくれなかったんですか！」「ウルウル

上条「操析…泣くなって、俺の隣座っていいから…」 ハア

食蜂「ありがとうございます♪」 ニコッ

00001, 2, 3 「「これがレストランですかとミサカは感動

します」「」

大和「驚きのシンクロ率だなあ…」

一方通行「おいてめエらこっちだ」

一方通行が呼んでいる方へ7人は向かった。

そこには10人ぐらいが入ることのできる大きめの部屋があった

一方通行「料理はもう頼んであるから待っとけば届くぜエ」

上条「さすが一方通行！対応が早いな」

大和「やっぱりスペインに関係する料理が出るのか？」

土御門「スペイン料理を出さなかったら、スペイン料理店を名乗る

資格なしぜよ」

上条「でも一方通行が第7学区の店を選んでくれて助かったな」

大和「たしかにな…お嬢2人の寮や俺たちの寮、カエル病院があるからな」

土御門「遠くまで飛ばなくていいからテレポ屋さんにも最適だにやー」

上大「俺たちはテレポーターじゃねーよ!」

食蜂「皆様!お食事が来ましたよ」

一同「「「「「「美味そうだな(ア)とミサカは…」」」」」」

土御門「それでは！皆さん！ただk「いっただっきまー！す！」
…にゃー…」

一方通行「まア…ドンマイだ」モグモグ

土御門「」

上条「どうだ？初めて食べるレストランの料理は」モグモグ

00001「すごくおいしいです！」パクパク

食蜂「それはよかったわね」パクパク

大和「すぺ…スペイン料理ってのも美味しいな」ギュオンギュオン
ギュオン

00003「周さん？食べる音が…」パクパク

食蜂「気にしちゃダメよ？彼はあれがデフォなんだからね」パクパク

大和「デフォじゃねーよ!」モグモグ

上条「ま、ミサカ達も喜んでくれて何よりってとこだな」

大和「他にやりたいこととかないか?」

食蜂「レベル5が3人いるのよお?なんでもできるわ」

00002「あの…ではひとつだけッ!」

上条「ん?なんだ?」

00003「お…お姉様に会いたいですとミサカは…」

一方通行「オリジナルにかア?」

00001「はい…無理でしょうかとミサカは首をかしげます」

上条「でもこの中で御坂美琴に面識あんのは操析だけだろ?」

大和「あとうちの弟子だけだな」

一方通行「てめエンとこの弟子は論外だコイツら見ただけでぶっ倒れちまう」

食蜂「私もちょっと無理ですね…寮が違いますし…」

00002「ならいいんです！無理を言って申し訳ありませんとミサカは謝罪します」

大和「いや、俺ならいけるな」

上条「お前が！？面識ないのか！？」

大和「こんど風紀委員の177支部に顔ださねーといけねーんだ…その時に超電磁砲にも来てもらっとけば、きっかけはつかめるかもしれないねえ」

一方通行「それしかねえな…頼んだぞ」

大和「任せろって！」

00001「なぜ彼らは初対面のミサカ達のためにあそこまでしてくれるのでしょうかとミサカは戸惑いをあらわにします」

食蜂「それはね、貴方たちをひとりの人間として見ているからよ…あの人たちがどうやって実験を止めたかなんて知ってるんでしょ？」

00003「はい。カエル先生に全てを教えていただきましたとミサカは答えます」

00002「それでもミサカたちはボタンひとつで簡単に製造できる物であって…」

食蜂「それでも貴方たちは生きているじゃない…それだけで立派な人間よ」

00001「ミサカたちは人間として生きてもいいのでしょうか…？」

00003「お姉様にご迷惑をおかけしてしまうのでは…？」

食蜂「そこは大和さんがどうかしてくれるわ…あの人たちを信じ

ましよう」

食蜂達が話している時、上条は一方通行に呼ばれて店の外へ出ていた。

上条「いったいどうしたってんだよ？」

一方通行「黙ってきけよ？…妹達が1体だけだが再び製造されているらしいんだ」

上条「!？」

一方通行「ンで、俺はア明日までに研究所の場所を掴んでおく。だから明日は予定を開けておいてくれエ」

上条「わかった……でも特攻は夜なんだろう？」

一方通行 「あア……すまないな当麻」

上条「いいって！別に気にすんなよ困ってたらお互い様だろ？」

一方通行「フツ…ありがとなア」

そうして二人は店の中へ入っていった。

大和「食った食った」ゲフウ

土御門「きたないにや」

上条「んじゃ……今日はお開きだな！」

「同」「同」「同」「同」「ごちそうさまでしたー!!」「同」「同」「同」「同」

」

上条「操祈…この店にいる店員の全員の頭の中から妹達の記憶を消しておいてくれ」ヒソヒソ

食蜂「わかりました☆」キュピーン

上条「ありがとな」ナデナデ

食蜂「にゃッ!?!?／／／」

大和「じゃあこの子達は俺が送っていくな!」

上条「悪いな…よろしく頼む」

00001, 2, 3 「「「よろしく願いしますとミサカは…」」

大和「シュウ・ヤマト！行きます！！」 シュンッ

上条「あいつは一体何がしたかったんだ？」 ハテ？

土御門「やっぱりガン〇ム大好きなんだにゃー」

食蜂「それでは私たちも帰りましょう」

一方通行「あア…そうだな」

8月30日(火) (後書き)

ガン〇ムのセリフを入れたいがために大和を犠牲にしました。

こういった食事のシーンはほのぼのとしていいと思いませんか？

8月31日(水) (前書き)

さあ！今日は突入です！

8月31日(水)

――○○学区路上

学園都市最強と学園都市最凶の男は2人揃って仲良く歩いていた

上条「つまり、その研究施設に打ち止めと呼ばれる妹達ラストオーダーがいるんだな？」

一方通行「ああ…ハッキングで手に入れた情報が正しければな」

上条「でも、なんで1体だけ生み出すことにしたんだ？」

一方通行「わからねえ…ただクソツタレどものレポートによると、
「いつか使う時が来る」…って書いてあったけどなア」

上条「いつか…ね…」

一方通行は上条にハッキングで手に入れた情報全てを話していた道を曲がり再び進もうとしたその時…

大和「おいおい…俺を置いて行く気か？」

家に居るはずの周大和がそこにはいた

上条「な…なんで大和がここに!？」

大和「簡単に言うとストーキングかな？」ニヤニヤ

一方通行「チツ…なら今、俺たちが何をしようとしているのかも分かっただろ？」

大和「モチのロンだぜ」

上条「お前も来る気か？」

大和「あんなこと聞いて黙って帰れっかよ！」

一方通行「ほかの3人はいねェんだろっうな？」

大和「ああ…あいつらは呼んでない」

上条「土御門はともかく、女の子をこんな殺伐とした場所に連れて来たくないからな」

一方通行「居なくて正解だぜエ」

そして一方通行は研究所が防衛として雇った暗部のグループ「アイテム」のことを2人に話した。

上条「つまり、その長髪の女には気をつけろと？」

一方通行「あア…そいつは第4位だ、まア俺たちが負けるわけないけどなア」ニヤニヤ

大和「だな」ククク

上条「さあて行きますか！」

3人は全速力で研究所へ向かった。

上条「ここか…」

一方通行「あア……………ここ…ここ…だ…………」ゴホッゴホッ

大和「体力なさすぎだろ」ケラケラ

上条「じゃ最優先は打ち止めで！ラストオーダーアイテムの奴らは殺すなよ？俺たちは一般人だからな？」

大和「わかってるって！」

一方通行「死ぬなよ…」

——研究所—物資搬入口

上条「互いにな」

大和「誰も居ないのか…？」

そう呟く大和の左側から人形が飛んできた

大和「なんだッ!？」

咄嗟によける大和。その直後人形が爆発した

?? 「あんたが侵入者であってる訳？」

爆弾が飛んできた方向に金髪の高校生ぐらいの女の子が立っていた。

大和「おいおい…人形は遊ぶためのものだけ？爆発させちゃ可哀想だろうがフレンダさんよお」ニヤニヤ

フレンダ「結局五月蠅い訳よ…とっとと死んでくれたら楽なんだけど！」

彼女が言葉を発し終わると大量の人形が飛んできた

爆弾

大和「!？」

——研究所一培養基安置部屋

一方通行はいち早く培養基を見つけた

そこには超電磁砲を4歳前後若くした容姿の女の子が入っていた

一方通行「こいつが…打ち止めてやつなのか…？」

??「そのガキが誰だか知らねーけどさ、私たちはその護衛なんだよね」

一方通行「てめえは…第4位、麦野沈利だな」

麦野「ああ！？…てめえは第1位か…」

一方通行「ああ…悪イがそこをどいてくンねエか？」

麦野「はあ！？そのガキを連れ出すってのかよ」ケラケラ

一方通行「ああ…その通りだ」

麦野「連れ出してどうするってんだよ！！」

一方通行「そんなときはそんな時だ…今はコイツを助けるのが優先なんだなア、てめえに構ってる暇はねェんだよ！」

麦野「第1位だからって一人でこの街の【闇】をどうにかできると
思っなよ!?!」

一方通行「ふん…俺たちはなァ…一人じゃねェんだよ」

麦野「うっせー…ーんだよ!ここで消えてなくなりやがれ!第1
位!…!…!」

彼女は右腕を一方通行の方向に伸ばした。

刹那

右腕から光の光線が飛び出し一方通行に向かって飛んでいった

一方通行「チッ!」

——研究所内部——メインコンピューター室

上条「ここは…コンピュータールームか…？」

??「あなたが侵入者ってことで超間違いはありませんね？」

上条「えーつと…絹旗…最愛^{モアイ}だっけ？」

絹旗「最愛^{モアイ}じゃありません！最愛^{さいあい}です！」

上条「んでアイテムの絹旗サンは俺たちの邪魔をしようど？」

絹旗「ええ…超その通りですよ！」

彼女は能力を使って上条に殴りかかった

上条「あつぶねえ！」 ヒヤヒヤ

よけると同時に右腕で彼女の肩に触れた

絹旗「反射神経は超良いそうですね」

上条「まあな、昔鍛えたから」

絹旗「ですが！これで終わりです！！」 ブンッ

絹旗は窒素装甲を展開し上条に再び殴りかかった…
オフエンスアーマー

上条「…」ニヤッ

絹旗「な…ぜ…なんで無傷なんですか!？」

上条は絹旗に鳩尾を殴られていた。だが傷一つ負わず、後方にも飛んでいなかった

上条「簡単なことだ…お前の窒素装甲を借りたまでさ」

絹旗「はア!?!私を馬鹿にしてるンですか!?!」

上条「馬鹿にはしてないさ…ただし、お前が俺に勝つことは100

%ないってことだけは断言できるね」

絹旗「こんなところで負ける訳にはいかねェんですよ！闇の人間は失敗したらそこで殺されちゃうんです！私はこんなところで死にたく無いんですよ！」

上条「でも顔にはもう「戦いたくない」って書いてあるぜ？」

絹旗「!？」

上条「今ならお前を暗部から引っ張りだすことができる。しかもその後の命の保証もある」

絹旗「そんな…こと…超無理に決まっています…」

上条「いいや俺にはできる。表に戻りたいんなら俺の手に触れろ、戻りたくないんなら今すぐここから立ち去れ」

絹旗は少しの間考え、上条の手に触れた

その瞬間目の前の風景が代わり、目の前には逆さづりになった人物が映った

――窓の無いビル

アレイ☆「来ると思っていたよ…上条当麻」

上条「ようアレイスター…久しぶりだな」

絹旗「あ…アレイスター！？あ、あの統括理事長の！？」

アレイ☆「ふふふ…その通りだ、私こそ学園都市統括理事長アレイスタークロウリーだ」

上条「能力使ったせいで腹減ってきたんだけど」

アレイ☆「要件はなんだい？」

上条「華麗なスルーっぷりだな……アレイスターにお願いがあつてきたけど……どうせ知ってるんだろ？」

アレイ☆「勿論だよ……君たちの戦闘は全て見ていた」

上条「なら話早いな……アイテム全員を表に返してやってくれ」

アレイ☆「ふむ……別に構わないが」

上条「それと命の保証もな」

アレイ☆「わかった………おい！」

側近「上条様……こちらです」

アレイの側近は4枚の用紙を上条に渡した

その内容を見た上条は口元を緩ませ3枚の用紙を空間移動させた

上条「あ…それと絹旗を俺の妹として戸籍追加よろしく」

そう言い残した上条は絹旗を連れて研究所へ空間移動していった

—— 研究所

大和「ふ…ふふふ…あっはっはっはっはっは！！！！あの野郎おもしろえことしやがるじゃねーか！！！！ほら見てみろよ！！フレンドさんよお」

大和は手にもっていた用紙をフレンドに渡す

フレンダ「!?!?…これは一体…何がおこってる訳よ?」

一方通行「ククク…こりゃすげエな」

一方通行は足のベクトルを操作して麦野の目の前に移動した
あまりの速さに麦野は追いつけずいきなり目の前に現れた一方通行
に驚いていた

一方通行「第4位…これを見てしろ」

麦野「はぁ!?!?んだよこれは!! 一体何がおこってんだよ!!!!」

一方通行「俺の仲間がアレイスターに交渉したんだろオヨ」

麦野「私たちが…表に戻る…？」

一方通行「ふン…あとは自分たちでどうにかするんだな」

P i r r r r r

一方通行「当麻か…何なに…？クハッおもしれエことしやがンな！」
ケラケラ

一方通行「オイ第4位！絹旗とかいうガキはうちの仲間が保護した
そうだ。あいつは別の場所に移動してるよオだからもうここにはい
ねェってよ」

一方通行「……………10分だ…10分後にこの研究所は俺が破壊する…それまでに逃げておけよ」

そう言って一方通行は培養基から打ち止めを出して、そこらへんに落ちていた布切れを被せると研究所の外へ出ていった

大和「当麻はどうした？あいつも入院か？」

一方通行「元アイテムのガキに今の現状と、俺たちの周辺のことを教えているらしい」

大和「そっか…それにしてもさっきの高電離^{プラスマ}気体…だっけか？すごかったな」

一方通行「計算がちよっぴりダルかったけどなア…」

そこに冥土返しと上条兄妹が入ってきた

冥土「打ち止めは少しの間ここで調整だね…そのあとは一方通行、君が面倒見るんだよ？」

一方通行「はア！？俺かよ！！」

大和「いいんじゃないか？頑張れよ一方通行！」

冥土「決まりだね？僕は調整があるからもどるからね」

そう言い残して冥土返しは部屋から出ていった。

絹旗「いきなり暗部から抜け出しても、実感が超わかりません」

上条「ま、徐々に慣れていけばいいさ」

大和「そうそう、ゆっくり慣れていけよな…それと俺のことは大和って呼んでくれ」

一方通行「俺は一方通行で構わねえ」

上条「俺のことは好きに呼んでくれ」

絹旗「は…はい、よろしくお願いしますね…大和さん、一方通行、お兄ちゃん」

上条「お兄ちゃん！？そっそれは…」アセアセ

大和「頑張れよ！お兄ちゃん！」ケラケラ

一方通行「お兄ちゃん」ケラケラ

上条「てめえら…くそつたれが…」orz

大和「もうそろそろ帰ろうぜ…明日は始業式だ！」

上条「そうだな…帰るか！」

彼らは自分たちの寮へ帰っていった

上条「たっでーまー」

絹旗「お…お邪魔します」

上条「お！さっすがアレイスター行動がはやいぜ！」

上条の目の前にはベッドが二つ置いてあり、片方にはキャリーケースと「柵川中学」の転校許可書が置いてあった。

絹旗「こ、これは…一体…？」

上条「俺が頼んでおいた品だな…お前も学生だろ？なら学校に通わなきゃな」

絹旗「制服まで入ってる…ここまでしてもらって大丈夫なんですか？」

上条「まあ…お前の兄になったわけだし、遠慮すんなって！」

絹旗「超ありがとうございます」

上条「ちなみに初登校は明日だから。先に風呂に入って早く寝たまえ」

絹旗「は…はい！」

そうして絹旗最愛は新しい人生を歩み始めるのであった。
そして、色々な行事がある2学期が始まる！！！！

――窓の無いビル

?? 「どうゆうことだ！アレイスター！アイテムを解体するなどッ
！」

アレイ☆「今日はお客さんが多いな…君は何が目的だい？」

?? 「いくら幻想殺しの頼みだからといって簡単に暗部グループを
解散させるなど！」

アレイ☆「構わないさ…あれがなくても私のプランに支障はない」

?? 「俺はお前の考えていることなど分からない…」

アレイ☆「普通の人間には理解などできるはずもない」

??「お前は一体何が目的なんだ!？」

アレイ☆「……………連れて行け」

アレイスターが言葉を言い終えるのと同時に案内人が現れ、訪問者を連れていった

アレイ☆「私も上条当麻の生き様を見届けたくてね」ククク

誰も居ないビルの中に不吉な笑い声が響いていた。

8月31日（水）（後書き）

アレイスターを「アレイ☆」にしたほうが、シリアスモードからすぐに脱出できると思ってアレイさんを☆にしました

絹旗を妹にした理由は、

？まだ中1で、ずっと暗部にいたらしいから一般人として生きにくいのではないかと上条が考えたから。

？ただ単に作者が一番好きなキャラクターだから

二つ目は理由になっていませんね…

9月01日(木) (前書き)

新学期なので少し気合を入れて書きました。

長文になります申し訳ありません

9月01日(木)

— 9月01日早朝

上条「んああ？なんだこのいい匂いは？」

絹旗「お兄ちゃん、おはようございます。朝食を作っておきました」

上条「（ああ…そっか俺、妹出来たんだっけ）ありがとう」

絹旗「あまり残ってるものが少なかったので、あまり多く作れてないんです」

上条「いや、問題ないぜ…食べないよりましだからな」ナデナデ

絹旗「んな！…なんなんですか！？／／／」

上条「さあ？　なんででしょうか？」ニヤニヤ

絹旗「早く食べましょう！　学校に遅れますよ！」

上条「ああ…そうだな（まあ昨日ほどじゃないけど落ち着いてるな…慣れてきてるのか？）」

2人「「いっただっきまーす」」

朝食を食べ終えた2人。

学校へ行く準備も終わり、いざ出発！

上条「絹旗は一人でも大丈夫だな？」

絹旗「子供扱いしないでください！　あと、私のことは最愛でいいです」

上条「ああ…わかったよ」

大和「早く出発しねーと遅れるぜ?？」

土御門「そんなあなたにテレポーター! 1時間1500円だにゃー」

大和「俺たちはテレポートが使えるだけであってな…別にテレポーター(r y)ガミガミ

一方通行「説教始めた大和は置いていくかア」

絹旗「私は超こっちなので、それではまた後で」

大和「頑張ってなー」

——とある高校の校門

大和「なあ…やっぱりいつになってもこの視線は止まらないのね」

土御門 「そりゃあこの面子じゃ止まらないぜよ」

一方通行「ねみい」

上条「ん?.....おい一方通行ちよつとこつちに来ようか」

一方通行「あア…なんだよ」

上条に近づく一方通行。

そして右腕で彼は肩を掴まれた

一方通行「あっつああああああああああああああああああ
アアアアアア……！！！！！！！！！！！！」

」

大和「こいつ反射してたがったのか!？」

土御門 「かみちゃんもよく気がついたにゃ」

上条「いやあさ、一人だけ汗かいてないんだぜ？ おかしいだろ」ニ
ヤニヤ

一方通行「手を……話せエエエエエエエエエエ！！！」

「」

もちろん一方通行の腕力じゃ上条の腕を振りほどける訳がない。

そうこうしているあいだに教室についた上条一行

上条たちが席に座ると同時にチャイムが鳴り、彼らの担任が入ってきた

小萌「HR始めますよー」

上条「先生！始業式は何分ぐらいですか？」

小萌「40分ぐらいですね」

青ピ「先生！いくらなんでもながすぎちゃいます？」

土御門 「あのクソハゲの話が長いだけでにや」

小萌「校長先生はたしかにハゲてますが…口にはだしてはいけ
ないですよー」

一方通行「ちよつくら昏倒させてくるわア…」

小萌「一方通行ちゃん！それだけはやっちゃいけないですよー」

そうこうしている間に始業式の5分前になっていた

小萌「みなさーん！早く移動してくださいなのですよー」

>うーい

>今行きまーす

始業式

ハゲ「…であるからして…ここはこうなんですが…」

ハゲ「2学期というのはですね…」

一方通行「（うぜエ…黙らせるか）」

一方通行が演算を終えるとハゲ校長の方向へ空気の塊が飛んでいった

ハゲ「大覇S…ビブルチツ!…」チーン

教師「「校長先生!!!」」

一方通行「決まったぜエ…」

土御門「ナイスだにゃー」b

大和「俺でも出来たけどな」ゲラゲラ

上条「先生たち焦ってるぜ」ククク

そうして始業式は20分前後で終わった。

小萌「校長先生が突然倒れたので始業式は終わりました」

小萌「2学期は大覇星祭もあるので頑張っていくのですよー!」

一同「「「「「「「「おー！」「「「「「「「「

LHRも終わり、下校するように言われたので彼らは遊びに行くことにした

上条「ゲーセンでもいくか」

大和「賛成！第6学区に向けて出発じゃー」

そうして彼らはゲームセンターのある第6学区へ向かうのであった。

今、お兄ちゃんたちと離れて柵川中学に向かって歩いています
そんな私に突然話しかけて来た人たちがいます…

?? 「見慣れない顔ですね…もしかして転校生とかですか!？」

?? 「佐天さん、そんなわけなんですよ…見たことないんだったら
先輩でしょう」

さてん…と呼ばれた方は黒いロングヘアーにお花のヘアピンを
付けている
美人な人で、
もう一人は…花???

佐天「初めまして！柵川1年の佐天涙子って言います。あなたは転校生ですか！？」

絹旗「はい。絹旗最愛っっています1年生に転入することになります…」

自分の口調も忘れてしまうほど緊張してます！
助けて！！！！

??「佐天さん絹旗さんが驚いてますよ…私は初春飾利といいます。同じく1年です」

初春飾利さんに
佐天涙子さん…
超面白い人達です同じクラスだったら超うれしいのですが…

絹旗「学校に着いたら、校長室に超行かないといけないんです」

佐天「だったら私たちが案内しますよ！」

初春「困っている人を助けるのが風紀委員の仕事です！」エッヘン

やはり超いい人達です！

――校長室

校長「君が転入してきた絹旗くんだね？…ほうほうレベル4！？その年で優秀なんだね」

絹旗「お褒めいただき超光栄です！」

校長「君にいいお知らせだよ、さっき君を連れてきた彼女たちとは同じクラスになっているからね」

キタ——（。△。）——！！

同じクラスです！超嬉しいです！

絹旗「あ、ありがとうございます！」

校長「それでは1日でも早くこの学校に慣れるようにね」

絹旗「はい！……失礼しました」ボタン

廊下に出ると、佐天さんと初春さんが待ち構えていました

佐天「やったね！絹旗さん！同じクラスだよ！」

初春「これからよろしくお願いしますね」

握手をしていたら女の先生が近づいてきました

佐天「あ…絹旗さん、この人が私たちの担任の山口先生ですよ!」

山口「貴方が絹旗さんね? 私は山口美嘉。よろしくね」

目の前に26歳ぐらいの若いグラマーな女性が立ってます
私もあそこまで大きくなるんでしょうか…?

初春「山口先生にはお子さんがいるんですよ!」

え…!? この若さで人妻ですか!? 超すごいです

佐天「確かお子さんの名前は…:拓也でしたっけ?」

山口「その通り、私の息子は山口拓也よ…:そんな話はどうでもいいわ! HRが始まるから教室に戻りなさい!」

佐初「はーい」

山口「ごめんなさいね…:あの2人はいつもああなんだから」ヤレヤレ

絹旗「いえいえ：超いい人達じゃないですか」

山口「私たちも行きましょう？」

絹旗「はい！」

ついにこの教室に入るんですか：超緊張してきました！
でも、なかには佐天さんと初春さんがいるんです！
きっと大丈夫ですよ！

>入ってきてくださーい

ガラガラ：

絹旗「超失礼します：」

>カワイー

>背低いねー

山口「それでは絹旗さん、自己紹介を」

絹旗「はい…」

私は自己紹介で、自分の能力、兄と呼べる人の存在、兄の周りの愉快な人たちのこと…

みんな真剣に聞いてくれました。

唯一、過去のことは話ませんでした。

絹旗「……………以上です」

山口「はい次は質問タイムですよー」

絹旗「ええ！？聞いてませんよ！」

山口「言ってますんよ？」ニヤニヤ

えええええあれでも教師なんですよね…
超ひどいです

質問では色々なことを聞かれました
楽しい時間はすぐにすぎるんですね…

山口「始業式が始まるので移動してください」

>はい

>だるいわー

———
体育館

校長「…であるからにして…できればこうしてほしいのですが…」

絹旗「あの校長ウザイですね…ちょっと昏倒させましょうか？」

初春「!?!?それだけはやめといったほうがいいですって!」

佐天「そんなことしちゃうと初春に捕まっちゃうゾ」ニヤニヤ

絹旗「それは超困りますね」

初春「事前に事件発生を止めるのも風紀ジャッジメ「今のは私が止めたんだけどなあ…」ひどいですよ佐天さん…たまにはいい格好させてくださいよ」

ヒソヒソ話をしてたらしいのまにか始業式も終わって、超楽な状態になってました。
教室に帰ったら2学期の目標を山口先生が言って、それをみんな受け流してました

山口「もう下校しても大丈夫ですよ」グスッ

初春「今日は風紀委員の仕事があるので！先に帰りますね」

佐天「絹旗さん！私たちも行こうよ！」

絹旗 「ごめんなさい：お兄ちゃんたちと超遊ぶ約束があるので：」

佐天 「それなら仕方がないね：それじゃ！また明日ね」 ノシ

絹旗 「超頑張ってくださいねー！！」 ノシ

P i r r r r

お兄ちゃんからメールが届きました。

第6学区のゲーセンに超待ち合わせのようです

いざ第6学区へ！！

食蜂操祈と白井黒子は2人で歩いていた

食蜂「御坂さんのことはいいの？」

黒子「今日は早めに学校へ行かれたので、わたくしはひとりでしたの」

食蜂「そこで私を見つけて、走ってきたと」

黒子「その通りですの」

??「あら：珍しい組み合わせね」

黒子「綿辺先生！おはようございますの」

食蜂「先生、おはようございます」

綿辺「おはよう…でもどうして寮が違う貴方たちが一緒に登校してるのかしら？」

黒子「え、そ…それは」チラッ

食蜂「白井さんが寂しくて私に飛びついてきたんですよ」クスクス

黒子「う…黒歴史ですの」

綿辺「大げさね」クスクス

食蜂「そういえば、白井さんに師匠ができたそうじゃないの…」

黒子「やっと聞いてくださいましたの…！」

綿辺「聞いて欲しかったのね」クスクス

黒子「レベル4の空間移動の殿方なのですが…」

食蜂「どんな人なの!？」クワッ

綿辺「がつつきすぎよ…」

黒子「周大和…とい「はああああああ!？」…どうかしめたの?」

食蜂「(だ…だからあの日あのレストランに白井さんがいたんだわ…大和さんはロリコンだったのですね)」

黒子「師匠はわたくしと同じレベルなのですが、能力の強さが圧倒的に違うんですの」

食蜂「(そりゃそうよ…大和さんはレベル5ですもの)」

黒子「今度、特訓を受けさせてもらえるんですのよ」

綿辺「特訓?」

黒子「はい。師匠のお仲間の方と模擬戦をさせてもらえるんですの」

食蜂「（え…ちょ…無理ゲーってやつじゃないかしら…）」プルプル

黒子「操祈さん？なぜ震えているんですの？」

食蜂「いや、ちょっと面白いことがあってね…思い出して笑ってしまったの」アセアセ

綿辺「じゃあ私はここで。早く学校に行くのよ？」

黒子「わかりましたの」

そして笑いを堪えながら道を歩いていると、常盤台中学の校門に着いていた

黒子「では、わたくしはここで」

食蜂「ええ…ではまた後日」

黒子「失礼しますの」

そう言って白井は靴箱へ走っていった

走って行く白井を見届けたあと、彼女は自分のバッグから携帯を取り出し

今日の予定を確かめていた

食蜂「今日は……………」

そして、自身のクラスへ着いた彼女は携帯をバッグに片付けると簡単に髪を整え

教室に入っていた

クラスメート「」「」「おはようございます」「」「」

食蜂「皆さんおはようございます。今日もよろしくお願いしますね」

そしてHRも終わり、始業式に向かうお嬢様達

いくらお嬢様学校と言っても校長の話は長いのであった…

校長「であるからですね…今年こそは…」

食蜂「（いくらなんでも長すぎではありません？……当麻さんはむやみに能力を使うなど言っていました……約束を破ってごめんなさい！！）」キューーン

校長「ですから……えーっと……ここまでにします」

教頭「校長！？お話の途中ですよ！？」

校長「イエ、ハナシハオワリマシタ」

—— 教室

担任「急遽予定を変更して進みましたが、今日の日程は全て終わりました。安全に考慮して下校するように」

一同「」「」「失礼します」「」

食蜂「さて…今日はどうしようか」

P i r r r r r

食蜂「こんな時間に一体誰なんでしょうか」チラッ

食蜂「当麻さんから！？今すぐお返事を！」パカッ

F r o m 当麻さん

よう！当麻の携帯借りてメールしてるぜ！

一瞬当麻かと思って急いだら？（笑）
その風景が浮かんできて皆爆笑だぜ？

それと、皆で第6学区のゲーセンで遊ぶ
ことになったんだ。

ミサキチも早く来いよな

B y 大和

食蜂「遊ばれてますよね？絶対」シクシク

テンションの下がった食蜂だが、ちゃんと待ち合わせ場所に向かう
のであった。

第6学区ゲームセンター入口

4人の男子高校生と1人の女子中学生はお嬢様が到着するのを待っていた

大和「ミサキチの野郎遅いな」

一方通行「あんなメール送ったから来る気失せたンじゃねエのか？」

土御門「でも、ここにはかみやんがいるぜよ…100%来ると思うにゃー」

絹旗「1つ超気になったんですよ、第5位はお兄ちゃんのこと超好きなんですよね？それでいつもフラれている…なんでお兄ちゃんはその人のこと受け入れてあげないんです？」

上条「たしかに操析は可愛いし、美人だし、凄い奴だよ…たださ、常盤台は女子校だろ？もし俺がOKしたらめんどくさいことになるんじゃないかと思ってるわけ」

絹旗「え…それじゃあ卒業したら…？」

上条「さあな…そんなときはそんなときだ」

大和「ん？あの金髪はミサキチじゃねーの？」

上条「だな…お前らは先に中に入っといてくれ」

一方通行「どうかしたのかア？」

上条「妹^{いもうと}の存在を伝える。偽りなしで…だ」

土御門「そうゆうことならさきに入っておくぜよ」

土御門、一方通行、大和の3人は先にゲームセンターに入っていた
そして食蜂と合流した上条は絹旗のことを全て話した

食蜂「だいたいのは理解しました」

上条「よし！それなら店に「ですが…！！」…何…？」

食蜂「どうして打ち止めちゃんを助けに行くとき私を呼んでくれなかったんですか!？」プンプン

上条「だから、女の子を危険に晒したくなかったんだよ」

食蜂「そんなに…そんなに私は…頼り…ないんですか？」グスッ

上条は絹旗に入っとけと伝えると食蜂と共にどこかへ歩いていった

大和「最愛ちゃん! あいつらはどうしたの?」

絹旗「いえ、研究所突入のお話のとき食蜂さんが「私は頼りないの?」とおっしゃって彼女を超慰めるためにどこかへ連れていったんです」

土御門「なるほど…いつものパターンだにゃー」

大和「だな!…お! このゲーム面白そうじゃねーか!」

そこには能力の強さを測るパンチングマシンが置いてあった
経歴の上位10人の名前が全て同じなのが驚異的だが

一方通行「超電磁砲はこんなとこで何をやってんだア？」

大和「上位10名が全員御坂美琴だぜ？こりゃすげーや」

絹旗「私たちも超やってみましょう！」

土御門「俺はパスだにゃー…無理ゲー全開だにゃー」

大和「つつーわけで俺から……な！！」バシンッ

＞テッテレレッテッテー…歴代第1位に認定！

大和「あっははははは1位になっちまったー」

土御門「棒読み全開だにゃー」

絹旗「次は私ですね……超窒素パーーーーンチ！！」バコオ！

＞テッテレレッテッテー

絹旗「第6位ですか…それでも1位は私の2倍ですか…超勝ち目ないじゃないですか！」ウガー

一方通行「次は俺かア……自転エネルギーを集めてエ…力を抑えてエエエ…」ウズウズ

一方通行「今だ！」ドカアアアアアアアン！

>error……採点不能ノ能力ノタメ自動的ニ第1位ニシマス

一方通行「これが第1位の力だア」

大和「威張ってんじゃねーよ！…一瞬壊れたかとおもったじゃねーか！」ヒヤヒヤ

土御門「お！かみやんの帰還ぜよ」

上条「おーい遅れてごめんなー」

大和「別にいいって！それよりもレースのゲームやりにいこうぜ！4人対戦できるやつがあるらしいから！」

一方通行「別にいいけどよオ：操析たちはどうするんだ？」

食蜂「私は最愛さんとプリクラを撮りにいくので、後で集合にしましょう」

上条「了解だ！じゃあまた後でな」

食蜂たちは伝えることをしっかりと使えるとプリクラのあるほうへ歩いていった

上条「今回こそは俺が勝たせてもらうぜ？」

大和「フ：トウマよ私についてこれるかな？」

土御門「負けるわけにはいかないんだにゃー」

一方通行「ねみィ…」

>3, 2, 1, GO!

結果

1位, 大和

2位, 一方通行

3位, 土御門

4位, 上条

一方通行「相変わらず弱いなァ…」

土御門「あそこでスリップしてたからにゃー」

大和「今回も俺の圧勝だな」

上条「」orz

レースは上条の大敗に終わり、レース中に決めた約束によりアイスを奢ることとなってしまった

そこに、プリクラを撮り終えた2人が戻ってくる

食蜂「当麻さーん」

上条「お！もう撮り終わったのか？」

絹旗「操祈さんては顔を超押し付けてくるんですよ！」

食蜂「絹旗さんは照れ屋サンなんですよね♪」ツヤツヤ

土御門「（ツヤツヤしてるにゃー…）」

絹旗「最後に全員で超撮りませんか？」

大和「いいね！行こう行こう！」

上条「美白モードは外さねーと一方通行が消えちまうな」ニヤニヤ

土御門「目だけが残って心霊写真みたいになるにゃー」ニヤニヤ

食蜂「1度消えてしまいましたものね」クスクス

大和「言われない放題の第1位」ニヤニヤ

絹旗「超消えるんですか!？」ビツクリ

一方通行「」o r z

そんな話をしている時、偶然ゲームセンターの中に設置してあったテレビ画面には
とんでもないニュースが流れていた。

上条「第22学区でテロ…?」

大和「おいおい…なんだあの巨人みたいなやつ」

食蜂「一体誰があんなことを…?」

土御門「一体何が起こってるんだにゃー…（このゴーレムはッ!!!
!）」

一方通行「生徒は避難しろ…だとよ」

大和「俺たちも助太刀に行こうぜ！」

食蜂「いえ、止めたほうがよさそうですよ」

一方通行「行っても警備員にとっ捕まえられるのがオチだからなア…」

土御門「今のうちに帰ったほうがよさそうだにゃー」

絹旗「ではプリクラは超今度ですね」

上条「じゃあ俺の部屋で遊ぶか」

食蜂「是非！是非そうしましょう！」キラキラ

大和「じゃあ急いで帰ろうぜ！」

そして第6学区のゲームセンターを後にした一行は急いで寮へ帰るのであった。

途中で土御門がコンビニに寄ったが帰っていいと言われたので4人で帰ることになった

— 家

上条「ただいまモスー」

絹旗「ただいま戻りました」

食蜂「お邪魔します」ドキドキ

一大「おじやまするぜ（エ）」

大和「操祈は未だに緊張してんのかよ…何回も来たことあるだろ」

ヒソヒソ

食蜂「それでも緊張してしまうものなんですよ？」ヒソヒソ

>いつまで玄関にいるつもりだい？

食蜂「い…今行きます！」

大和「はいはい、ちょっと待ってね」

そして上条のベッドに男たちが、絹旗のベッドに女たちが座った

上条「トランプでもやるか？」シャツシャツ

一方通行「ダウト」

大和「賛成！」

上条「じゃあ決まりだな……配るぜ？」

>ダウト！

>クソウ…

>超ダウト！

>不幸だ…

>ダウト！

>ふん…だからてめェは三下なんだよ

トランプに熱中してしまった上条一同。

ダウト↓大富豪↓7並べ↓ババ抜き…

どの種目でも一方通行が1位であることにかわりはなかった

大和「おいおいもうこんな時間だぜ」

時計>17；54分ダヨ

上条「もうそろそろお開きだな！みんなお疲れ」

大和「まさかこんなにトランプが楽しいとはな…」

一方通行「負けた回数が右手で数えられるンだけどさア…お前ら弱

すぎ」

食蜂 「一方通行さんが強いだけですよ！」

絹旗 「セコイです…超セコイです！」

上条 「操析はもうそろそろ帰らないといけないな…ちょっと送ってくる」

一方通行 「間違えても、学び舎の園には入るンじゃねエぞ？」

大和 「過ちは…繰り返させない！」 ウガー

上条 「意味わかんねーこと言ってんじゃねーよ！……んじゃ行ってくるわ」

食蜂 「それじゃおやすみなさい」 バタン

一方通行 「行っただか…」

大和 「行っただな」

一方通行「絹旗…ひとつだけ聞かせろ…表今と昔、裏どっちの生活が好きだ？」

絹旗「今と昔ですか…超愚問ですね、今の生活がいいに決まっているじゃないですか！」

大和「兄があいつでもか？」

絹旗「はい。お兄ちゃんがなぜ私を妹にしたかは超教えてもらったので…」

一方通行「そオカよ…ならいいんだ」

大和「もし…もしもだ、操析とあいつが付き合った場合お前は どうするんだ？」

絹旗「私はブラコンではないので、超関係のないことです…でも、いつまでも頼りになるお兄ちゃんできて欲しいとは思ってますが」

一方通行「当麻はずっと頼りになるやつだ…頼りにしていいと思うぜ？」

絹旗「はい！超わかりました！」

> たっでーまー

大和「早いな…空間移動したな？」
テレポート

上条「そとは危ないかもしれないからな」

一方通行「ンじゃ、俺たちは帰るからな」

大和「おっじゃしましたー」

2人は帰っていった

部屋に静寂が戻ってくる

上条「静かになったな」

絹旗「そうですね…」

上条「じゃー飯でも食って、早めに寝ますか！」

9月01日(木) (後書き)

絹旗のキャラが崩壊し始めてます
修正するつもりはありません。

ですが、ブラコンにはしないつもりです

食蜂ってこんな感じでもいいんですかね？

9月02日(金) (前書き)

お久しぶりです

書き溜めに追いついてしまったら困るので、2, 3日おきに更新していきます

一旦妹達の口調をカットします

9月02日(金)

——とある高校

今日、一方通行はオリジナル御坂美琴に妹達の存在を教えることになっていた

上条「ついに今日なんだな…」

一方通行「あア…」

大和「結局俺が動く前にカエル先生が動いたな」

上条「早めに終わらせておいたほうがいいだろ」

大和「操析はどうするんだ？」

上条「今日是用事があるそうだぜ」

土御門「好都合だにゃー」

大和「俺と土御門はわりいけど行かないから」

上条「そっちの方がいいと思うぜ…病院に行くのは暴走してもあいつを一瞬で止めることができる俺たちのほうがいいし、人がいっぱいいたらスペースがないしな」

一方通行「それじゃ…行ってくるわア…」ハア

大和「無事を祈ってるぜ」

土御門「それじゃ俺たちもいくぜよ」

大和「ああ…いざ風紀委員177支部へ！」

土御門「何でそんなにやる気がでてるんだにゃー？」

大和「さあ？　なんでだろうね」

そして彼らも教室から出ていった…

——
学び舎の園

突如、学校の先生から第7学区の病院へ行けと言われた御坂美琴は
カエル先生のいる病院へと歩いていく最中だった

御坂「どうして病気になってない私が病院にいかないといけないわけ？」

黒子「お姉様…わたくし風紀委員の仕事があるのでここでお別れですの」

御坂「あ、うん…頑張ってね」

白井は御坂とは違う方向へ歩いていった。

そして、何分か歩いていると第7学区の病院の入口についていた

御坂「はあ…何でいきなり病院に行けとか言うのかな」

御坂「知り合いが倒れたならその人から連絡がくるしなあ…」

そして病室から彼女を見ている白髪の男と一瞬だけ目があつた…

佐天「終わった――――」

初春「佐天さん……すこしうるさいですよ？」

絹旗「超疲れましたね」

佐天「体育あったからねー」

初春「では風紀委員の仕事に行ってきますね」

佐天「私たちも行こうよ！」

絹旗「でも、超大丈夫なんですかね？」

初春「ほんとダメなんですよ？…でも、今日は白井さんのお師匠さんが来るんですって！」

佐天「白井さんの師匠か…どんな人なんだろう」

初春「たしかレベル4の空間移動能力者だそうですね？」

絹旗「（この人たちには本当の能力を教えないようですね…）」

佐天「絹旗さんも行きましょうよ！」

絹旗「超そうしましょう！」

初春「それじゃあ行きましょうか」

3人の中学生は177支部へ向けて歩き始めた

——カエル病院玄関

冥土「君が御坂美琴君だね？」

御坂「（ゲコ太！？…いや違う違う）…はい」

冥土「いきなりだけど、今からこの病院内で見ることに聞くとここは全て事実だからね？…今のうちに覚悟を決めておいて欲しいんだよ？」

御坂「？…先生は一体何を」

冥土「こっちだよ…ついてきてほしいんだ」

御坂「は、はい」

そして病院の最上階で一番端の部屋にたどり着いた

そこには4つベッドがあり、1つはカーテンで覆われていた
そのカーテンがかかっているベッドの向かい側には白髪の男とツンツ
ン頭の男が座っていた。

冥土「まず…だね、この子たちはある実験を止めた子達なんだよ」

御坂「実験…？」

冥土「その名を絶対能力進化実験^{レベル6シフト}」

御坂「レベル…6!？」

冥土「ここからは落ち着いて聞いて欲しいね……」

冥土返しは実験の内容を嘘偽りなく御坂美琴に伝えた

御坂「つ…つまり…私を何人も用意できないから……私のッ!」

冥土「そう、その実験で最重要とされた学園都市第1位の一方通行
が彼だよ」

御坂「一方通行……」

冥土「だけど、1人も殺さず実験は中止になった、それは隣の彼がいたからこそ出来たことなんだよ？」

御坂「……………」

冥土「それでね研究所は彼が潰して、妹達は僕が保護してるんだよ」

御坂「そう……」

冥土「合ってみるかい？彼女たちに」

御坂美琴は何かを決断したかの様に首を強く縦に振った

シャー……

カーテンが開き、御坂美琴と瓜二つな少女が3人立っていた

00001「お姉様…初めまして」

00002 「お姉様初めましてなのさ」

00003 「初めましてだね、お姉様」

御坂「初めまして…」

冥土「あとは姉妹仲良く過ごすんだね…完全下校時間まではここにいて構わないよ」

そう言い残して冥土返しは病室から出ていった

上条「一方通行、俺たちも帰ろう」

一方通行「……」

病室から出ていった2人に後ろから少女の声が届く

御坂「アンタたちが誰かはよく知らないけど……私の妹を守ってくれてありがとう！」

上条「（私の妹か…いいヤツじゃねーか）…礼には及ばねーって…
…じゃあな」

彼らは病院かられていった

彼らの横顔は誰が見ても清々しい顔だった

——風紀委員177支部前

大和「ここか…」チラッ

土御門「中学生が3名にお姉さんが1人！楽園だにゃー」キラキラ

大和「どっから情報持ってきたんだよ…（目が輝いてるぞ！ヤバイ

んじゃねーか？」

＞師匠！こちらですの

大和「おっし…入りましようかね」

土御門「にゃー」

ガチャ

大和「おっじゃましまーす」

土御門「おじゃまするぜよー」

絹旗「超遅いですよ…ずっと待ってたんですから」

大和「あれ？なんで最愛ちゃんがここに？」

佐天「絹旗さんとお知り合いなんですか？」

土御門「俺らの親友の妹がこの子ぜよ」

初春「じゃあ、あなたがたが絹旗さんの言っていた…愉快的な人たちなんですね！」キラキラ

大和「愉快って……あれ？否定ができねーぞおい！」

土御門「心配するな…自覚はある」

大和「おい！どうしたいきなり」

土御門「いきなり言ってみたくなったから言ってみたぜよ」

固法「初めまして、貴方が白井さんの師匠なの？」

大和「ああ…そんなところですかね」

土御門「（上から90，65，85ぐらいか！？少し誤差があってもこのボディーはやばいぜよ）」

大和「自己紹介がまだだったな、俺は周大和…空間移動のレベル4だ」

土御門「俺は土御門元春。天下のレベル0ですたい」

黒子「わたくしは白井黒子ですの。師匠と同じ空間移動能力者ですの」

初春「私は初春飾利です。サーマルハンド低温保存って名前の能力を持ってます」

固法「私は固法美偉。クレアポイアンス透視能力を持ってるわ」

初春（周大和…さん…どこかで見たことある名前です…調べてみましょう）トテトテ

土御門「じゃあ今の俺らの下着までパッチリ見えてるのかにゃー！？」

固法「そんなものみる理由が無いわよ！」ポカッ

大和「ざまあ」ケラケラ

土御門「叩くことはないぜよ…」

黒子「お茶を入れてきましたの」

佐天「ありがとうございますーす」

固法「初春さんもいかがかしら？」

＞先に飲んでおいってください…すぐに行くので

佐天「じゃあいただきますしょう！」

初春「（周大和…表向きではレベル4を装っているが、本当はレベル5の第6位『座標補足』を持つ能力者…どうして嘘をついているんでしょうか…）」カタカタ

『レベル5になってからみんなの私をみる目が変わったのよね』

初春「（以前御坂さんがあんなことを言っていました…レベル5になると周りからの評価が変わる…それを恐れて偽装しているんじゃないか）」

＞初春「お菓子なくなっちゃうよー」

初春「今行きますよー（申し訳ないけど聞いてみましょうかね）」

佐天「初春が遅いからお茶冷めちゃってるよ」

初春「ごめんなさい…調べたいことがあったんで」

白井「調べたいこと…？事件でもありましたの？」

初春「いえ、以前書庫を覗いたとき『ある人』の名前を見たことがあるんです……」

大和「ある人？（やっべなー俺のことかもしれねえ…自己紹介のとき驚いたような顔してたしな）」

初春「はい、でも…」

佐天「ここにきてやめちゃうの？教えてよ初春」

大和「（もういっか）…その人ってのは俺のことなんだろう？初春ちゃん？」

初春「はい…ごめんなさい、人の個人情報を覚えているなんて…」

大和「仕方ねーさ…飾利ちゃんがどうやって書庫を見ているのかは知らねーけど、能力偽装してる俺が悪いんだからな」

黒子「能力偽装…？でも、師匠の能力は空間移動でしたの」

大和「じゃあよ、空間移動が能力の1部だってことはないか？」

固法「1部？…多重能力者はまだ現れてないはずよ」

土御門「1部ってのはそうゆう1部じゃなくて、能力で行うことのできる行動の1部なんだにゃー」

初春「座標補足…レベル5の…第6位…周大和さん…」

黒子「座標補足……？」

大和「そう、それが俺の能力。座標を求めてその場所に何かをするのが俺の能力なんだよ」

土御門「いわゆるチートってやつだにゃー」

大和「そのチート能力者達がレベル0に負けるってどうゆうことだよ」ケラケラ

佐天「レベル5がレベル0に負ける！？」

大和「ああ…第1位の一方通行、第6位の俺、2人ともがどうやっても勝てないレベル0が絹旗の兄ちゃんって訳」

絹旗「相変わらず超不幸ですけどね」ニヤニヤ

土御門「格闘戦だけだったら俺の方が強いぜよ」

大和「格闘オンリーだったらな」ニヤニヤ

初春「絹旗のお兄さんの周りにはすごい人ばかり集まってるんですね」

土御門「結果的にはそうなるんですけどい」

大和「で、黒子はどうする？俺は空間移動能力者じゃないんだぜ？」

黒子「それでも、師匠は師匠ですよ」

大和「へっそうかい…これからよろしくな」

黒子「はい！…それで明日にでも組手の相手をしていただきたいのですが…」

大和「明日なら俺たちは暇だな…よしわかった！受けてたとう」

佐天「私たちも見に行こうよ初春！」

初春「え…でも…」

固法「行ってきたいいわよ？その間は私が引き受けるから」

初春「ありがとうございます！」

大和「それで、黒子はこの中から選んでくれ」カキカキ

- 1, 攻撃を全て跳ね返す最強の男
- 2, 攻撃を全て曲げる男
- 3, 学園都市に存在するすべての能力を打ち消す男
- 4, 頑張ったら勝てるかもしれないアロハグラサン

土御門「にゃー!？」

黒子「4以外は無理ですの…」

大和「4の土御門クンに決定だ！」

土御門「」

佐天「え…土御門って私と同じレベル0ですよ？白井さん相手はキツイんじゃないですか？」

土御門「レベル0でもいいけるってことを佐天ちゃんに見せてやるぜい」キリッ

佐天「かっこいい…／／／」ボソッ

黒子「では、よろしくお願いしますの」

土御門「よろしくだにゃー」

大和「外も暗くなってきたから帰るか」

土御門「家の近くまで送るぜい？」

佐天「よろしくおねがいします」

大和「んじゃ帰るか」

177メンバー「「「おやすみなさい」」」

大和「おやすみ」

土御門「にゃ」

佐天「おやすみなさい」

——
路上

大和「もう真っ暗だなー…完全下校時間すぎてるっつーの」

土御門「先生に合わなくてラッキーぜよ」

佐天「この場合私は保護されて、説教なしですね♪」

大和「ひでーこと考えるな……」

土御門「フラグじゃないことを祈るぜよ」

大和「でも、明日が休みでよかったな」

佐天「明日…か、土御門さんは本当に大丈夫なんですか？」

土御門「問題ないぜよ！」

大和「まあお前の体術は当麻より強いけどな……体術だけだけど」

土御門「かみゃんはチートぜよ」

佐天「さっきのメモに書いてあった2人が未だに理解不能な能力な
んですよね」

大和「ああ…あれね」

土御門「4が俺で、2が…」

大和「俺…だな」

佐天「じゃあ残り2つの能力者は両方レベル5なんですか？」

土御門「一番上の『攻撃を全て跳ね返す最強の男』がレベル5で」

大和「3番目の『学園都市に存在するすべての能力を打ち消す男』はレベル0なんだよな…」

佐天「レベル0が全ての能力を打ち消す!？」

大和「いいか？涙子ちゃん…ここには未だに解明されていない力を持つものだっているんだぜ？」

土御門「だからレベル0だからって諦めちゃダメぜよ」

佐天「諦めちゃ…ダメ…か」

大和「涙子ちゃんだって能力を持ってるかもしれないんだぜ？」

佐天「以前、レベルアップ幻想御手^{レベ}ってものを使ったことがあるんです」

大和「それって確か……」

佐天「一時的に能力を使えるようになるんですが、そのあと気を失ってしまっんです…」

土御門「その時に能力は現れたのか？」

大和「（土御門のヤツ…真剣モードじゃねーか）」

佐天「はい…でも、今同じようなことをやってもなんにもおきないんです」

土御門「どんな能力が現れたか覚えてるか？」

佐天「風力使いの能力が出てました」

土御門「ラッキーだにゃー」

大和「何が？何でラッキーなんだよ」

土御門「俺らの周りには3人も風を操ることのできる人間がいるんだぜい？」

大和「俺のはダメだぜ？さすがに風力使いとは演算方法が違いすぎる」

土御門「一方通行とかどうだにゃー？」

大和「うーん…無理じゃね？いくらベクトルを操れるつつても…？…そうか！」

土御門「？」

大和「一方通行と上条のコンビだ！あいつらならできる！」

土御門「どうやってやるんだにゃー？」

大和「一方通行が涙子ちゃんの演算の補助をする。そのために上条が2人の意思を繋げばいいんだよ！」

土御門「かみやんの夕食が増えて妹さんが泣き目ぜよ」

大和「気にするな、俺は気にしていない」

土御門「他人ごとだにゃー！ー！ー！ー！！！！！」

佐天「ごめんなさーい、途中から話についていけないんですけど……」

大和「あ！ごめんごめん」

土御門「明日になったら今言った二人に協力してもらって能力開発に励むぜよ」

佐天「私の能力開発？学校でもダメだったんですよ…無駄に決まっています」

大和「おいおい学園都市最強の能力者が教えてくれるんだ…それだけで周りの人間は羨ましがるぜ？」

土御門「明日に備えて今日はしっかりと寝ておくぜよ？」

佐天「はい…わかりました」

大和「明日は、朝10時に指定した場所に来て欲しいんだ」

土御門「これ俺の携帯アドレスだから後でメールを送ってほしいぜよ」

佐天「わかりました！」

そう言うと佐天は自分の寮へ入っていった

大和「さーってあいつらにも協力を煽るかね」

土御門「そのために空間移動お願いしたいにゃー」

大和「はいはい」シュンッ

——上条の部屋

大和「……………てな訳で協力お願いします」

土御門「にゃー」

一方通行「俺ァ別に構わねェが、当麻の腹はどオスンだよ」

上条「操析じゃダメなのか？」

大和「あ…あいつの能力忘れてた」

一方通行「当麻！今すぐにメールしやがれエ！！！」

上条「『明日の朝から用事がなかったら、俺の家に9時に来て欲しいんだ。』

お前にしか頼めないことがあるんだ』 っと」メルメル

大和「絶対に来させようとしてるだろ」ケラケラ

土御門「『意思をつなげる役目は女の子に頼むことにしたにゃー』完璧ぜよ！」メルメル

大和「涙子ちゃんか？」

一方通行「そいつがその子かア？」

大和「ああ…」

土御門「ま、一方通行の頭と操祈の能力だったらいけるぜよ」

大和「間違えてもベクトル操作を教えんなよ？脳がパンクするぜ…」

一方通行「そんなことするかァ！風力使いだろ？余裕だぜエ」ニヤ

上条「やる気マンマンじゃねーか」

一方通行「わりィかよ」

上条「別に？どーってことねーよ」

＞お風呂超空きましたよー

上条「おっと…：我らのお姫様があがったので俺は風呂入ってくるな
」

大和「我らのってなんだよ…：我らのって…」

絹旗「あれ？みなさん超来てたんですね」

一方通行「じゃましてるぜエ」

大和「風呂上がりだからいつも以上に可愛く見えるな」

土御門「セクハラぜよ…」

絹旗「超セクハラです！」

大和「まじかよ…」orz

一方通行「てめェも明日来るのか？」

絹旗「いえ、明日は元同僚達と合う約束があるので…」

土御門「もし、ヤバいムードになったらすぐに逃げるのがベストですたい」

絹旗「肝に命じておきます」

大和「話を変えるけどよ、もうちょっとしたら夏祭りがあったはず
だろ？一緒に行こうぜ」

土御門「賛成だにゃー」

絹旗「私は、クラスメートと行く約束があるので…」

大和「無理に参加しろとは言わねーよ、楽しんでこいよな」

絹旗「はい！」

一方通行「祭り前にうちの部屋に居候が増えるんだけどよオ…そい
つの世話を手伝ってくんねェか？」

大和「別にいいぜー」

土御門「OKですたい」

一方通行「ン：サンキューな」

上条「良い湯だったぜー」

大和「お！あがってきたか」

一方通行「ドンだけ高温の風呂に浸かったらそんなに茹でタコに近づけるンだア？」

上条「茹でタコは失礼だろ…」ハァ

土御門「今、夏祭りの予定を立ててる最中ですたい」

上条「ああ…そういうやもうそろそろだったな」

大和「最愛ちゃんはクラスメートと一緒に行動するらしいから、俺たちは…」

一方通行「俺に当麻、大和、土御門、操祈、打ち止めぐらいかア？」

土御門「それぐらいだにゃー」

大和「今年も射的屋を襲撃するか？」ニヤニヤ

一方通行「アレをやるのかア？」ニヤニヤ

絹旗「あれって何ですか？」

説明しよう

彼らの言う「アレ」とは、飛んでいく弾に触れて弾を操ることによって弾の力量を底上げし、1列に並んでいる1番前の商品を押し飛ばし根こそぎ商品を獲得しよう！という内容である。

絹旗「それって犯罪じゃないんですか!？」

一方通行「別に弾に触れるとか書いてねェし」シレッ

大和「去年は能力使用禁止の看板が出てなかったし」シレッ

上条「今年は対策が練られてるんじゃないのか？」

土御門「絶対に能力使用禁止になってるにゃー」

大和「だよなあ…」

一方通行「チッ！楽しみが減ったぜエ」

上条「楽しみだったのかよ！！！」

大和「あーやべーもうこんな時間だ」

土御門「もうそろそろ帰るとするぜよ」

一方通行「だな…ンじゃまた明日なア」

上条「おやすみ」

大和「っじゃしましたー」

土御門「にゃー」

一方通行「ン」

しばらくして、上条と絹旗は夕食を食べ始めた

上条「最愛は今欲しい物とかないのか？」モグモグ

絹旗「今のところは無いですね」パクパク

上条「ならさ、祭り前に浴衣でも買いに行くか？」モグモグ

絹旗「でも、浴衣って超高額だったような気がするんですが」パク
パク

上条「俺が全部だよ」モグモグ

絹旗「いや…流石にそれは超迷惑じゃないですか？」パクパク

上条「別に気にしないけど？」モグモグ

絹旗「いや…でもですね」パクパク

上条「それじゃ買いに行くか！」モグモグ

絹旗「強制的に決定ですか…」パクパク

上条「ここにカタログがあるから見といてくれ」ゴソゴソ

絹旗「超わかりました」パクパク

＞皿洗うから持ってきてくれー

絹旗「超今行きます」トテトテ

そして2人は明日に備えて早めに寝るのであった

9月02日(金) (後書き)

妹達の口調を消させていただきます

もしあったほうがいいと思われる方は、感想に書いてください

食蜂の口調は原作とは違った話し方にします。

申し訳ありません

9月03日(土) (前書き)

今回は佐天と黒子が頑張ります！

9月03日(土)

警備員演習所

上条「つーかよくこんなところ借りれたよな」

一方通行「これが1位の実力だア」

大和「脅しただけじゃねーのか？」

食蜂「何はともあれ、あの子達が来るまで3時間しかないから早めに始めましょう」

一方通行「だなア」

土御門「佐天に紹介するにゃー…右の白髪が学園都市第1位の一方通行で、左の金髪が第5位だにゃー」

佐天「あ…あの！佐天涙子です。よ…よろしくお願いします！」

食蜂「タメ口でいいわよ？同じ中学生なんだし」

佐天「よろしくお願いします！」

食蜂「面白い子ね」クスクス

一方通行「始めるぞオ」

食蜂「大和さん！お願いします」

大和「はいよ」シュンッ

大和が右腕を振ると、彼女たちの目の前に横長の椅子と背の高い椅子が1個ずつ現れた

上条「どっから飛ばしてきたんだ？」

大和「企業秘密だ」

横長の椅子には一方通行と佐天。
背の高い椅子には食蜂が座った

一方通行「それじゃ始めるかア」

佐天「は…はい！」

食蜂「悪いけど、意思を繋ぎやすいように頭に手を置かしてもらいますね」

一方通行「一応反射を全て解除しとくからなア」

食蜂「……………繋ぎ終わりました」

一方通行「佐天…聞こえるか？」

佐天『聞こえます』

一方通行「繋がってる…完璧だア」

食蜂「では、頑張ってくださいね」

大和「んじゃ土御門は俺と組手でもするか？」

土御門「わかった…頼むぞ」

上条「めっちゃくちゃ真剣だな」

大和「当麻は177支部に行ってくれ、もう連絡は入れてるから」

上条「わかった」

大和「さあ土御門よ、佐天にいいこと見せるために黒子に勝てよ？」

土御門「もちろんだ！」

大和「それじゃー…行くぜ!」シュンッ

土御門「どこだ!？」

大和「ここだ!」ブンッ

土御門の後ろに空間移動した大和はそのままドロップキックを放った

土御門「!？」サッ

大和「今のを回避するのか…流石だな」

土御門「色々なパターンを繰り出してほしいぜよ」

大和「任せろ!」

そして、土御門は佐天にいいところを見せるために大和と模擬戦を始めた

一方通行『まず基本からだァ』

佐天『はい!』

一方通行『お前は、無風の密封された部屋に風を起こすことができるとおもうかァ?』

佐天『え…無理でしょう、風は自然に生まれるものですよ?』

一方通行『いや、できるんだ』

佐天『え…どうゆうことなんでしょうか?』

一方通行『自分だけの現実パーソナルリアリティってのは、一種の妄想なんだよ』

佐天『妄想…ですか』

一方通行『あア…だから俺は、世界に存在する全てのベクトルは自由自在に操れる…ってのが、常識になってる』

佐天『つまり、私は「無風の密封された部屋に風を起こすことができる」が、自分の常識にするんですね？』

一方通行『簡単に言うとなんとかだな』

佐天『無風の密封された部屋に風を起こすことができる無風の密封された部屋に風を起こすことができる無風の密封された部屋に風を起こすことができる…』

一方通行『試しに今から、手のひらに小さな竜巻を作る演算式をお前の脳みそに直接書き込む。それをなぞって現実化させるんだア』

佐天『は…はい！』

一方通行『送るぞ』

そう言った直後、佐天の頭に演算の式が浮かび上がった
それを同じように何回も頭の中で計算してみると、

佐天『す…すごい…本当に手のひらに…』

一方通行『お前には才能があるのかもしれないねエ…その感覚を覚えろ』

佐天『はい!』

一方通行はそういうと意思の共有を絶った
そのあとも佐天はひたすら練習をしていた

食蜂「ねえ佐天さん、能力を強くするにはどうすればいいと思う?」

佐天「能力を使い続けるとかですか?」

食蜂「それだけじゃダメなのよね」

佐天「そうなんですか!?!」

食蜂「ええ…まず1つ目」

休憩は必ずとる!

食蜂「休憩は必ず取らないと、頭がパンクしてヘタしたら気を失うの」

佐天「そうなんですか!？」

食蜂「当たり前よ：体育とかでも慣れてないことするとすぐ疲れるでしょ？」

佐天「たしかにそうですね」

食蜂「だから、休憩は必ず取ること！」

佐天「了解です！」ビシッ

食蜂「それで、2つ目は…」

計算に慣れる！

食蜂「この本をあげるわ」ゴソゴソ

っ「100マス計算集！」

佐天「100マス計算ですか？」ペラペラ

食蜂「計算に慣れるのに適してると思わない？」

佐天「まあ…たしかにそうですね…どッ!？」ペラペラ

食蜂「あら、気がついちゃった？」クスクス

佐天「後半の計算がなぜか2ケタとか…3ケタまで混じってる!？」

食蜂「頑張って！」

佐天「どこに売ってるんですか…」

食蜂「うーん…企業秘密にしておこうかしらね」ニヤニヤ

佐天「……まさか手作り!？」

食蜂「それはありえないわよ」

そんな話をしているとところに一方通行が帰ってきた

一方通行「一旦休憩を挟め…じゃねェと頭がパンクして意識が飛ぶぞオ…ほらミネラルウォーターだ」

食蜂「一方通行さんの言うとおり、休憩を挟まないと本当に危ないよ？」

佐天「わかりました…」

食蜂「そういえば当麻さん達は何処に行ったんですか？」

一方通行「土御門と大和は暴れても大丈夫なところに、当麻は第7学区の風紀委員177支部に行ったぞオ」

食蜂「そんな…」

佐天「もうそろそろ再開しても大丈夫ですかね？」

一方通行「あァ…でもまた休めよ？」

食蜂「もう1回繋ぐ？」

一方通行「一応な…」

キューン

佐天『よろしくお願いします』

そして彼女たちは練習を始めた

大和「動きが鈍くなってるぞ!!」ゴン!

土御門「ぐッ！」

大和「肩にモロ入ったな」

土御門「もうそろそろ…限界…だ…にゃー」

大和「じゃあ休憩するか？」

土御門「20分ぐらい欲しいぜよ」

大和「りょーかい」

土御門「空間移動ってチートぜよ…」

大和「そりゃーな…その分演算が面倒だけど」

土御門「にゃー……」

大和「そうだ…黒子にあの鉄矢を使わせないようにしないとな」

土御門「飛び道具はやめて欲しいぜよ」

大和「格闘だったらお前も平等に戦えるかもな」

土御門「半年前まで小学生だった子には負けないぜよ」

大和「でも、本当に大丈夫なのか？」

土御門「佐天ちゃんのためにも頑張るしかないぜよ」

大和「やっべえ…かつこすぎる」

土御門「もうそろそろラウンド2…開始してほしいにゃー」

大和「ふっ…私についてくれるかな？」

土御門「どこからでもかかってくるぜよ！」

大和「いい覚悟だ!!」 シュンッ

土御門は佐天のために…
大和は暇潰しのために…
彼らは再び模擬戦を始めた

— 2時間後 —

一方通行「大和が空間移動で弁当買ってきてくれて助かったぜエ」
モグモグ

食蜂「確かに…そうですね」パクパク

佐天「このパスタ美味しいですね！」チュルチュル

土御門「にゃー」モグモグ

大和「このパンも美味しいな」モグモグ

そんな彼らのもとに上条たちが近づいてくる

初春「佐天さん! どうでした?」トテトテ

上条「連れてきたぜー」

黒子「今日はよろしくお願いしますの」ペコッ

土御門「こちらこそよろしくだにゃー」

大和「模擬戦開始は10分後だ、2人ともウォーミングアップでもしておいてくれ」

黒子「わかりましたの」

土御門「了解だにゃー」

大和「それと、黒子は鉄矢をここに置いて行け」

黒子「では、ここに」

大和「……よし、たしかに受け取った」

土御門「じゃあ俺達はあっちでウォーミングアップでもしてくるにやー」

黒子「では、皆さんまた後で」ノシ

初春「それで、佐天さんはどうなったんですか!？」

佐天「多分、レベル1ぐらいにはなったと思うよ?」

初春「1日で…ですか!？」

食蜂「学園都市のレベル5が2人で手伝ったのよ?」

佐天「本当に感謝してます!」

初春「佐天さん！見せてくださいよ」キラキラ

佐天「ごめんねー初春…今、休憩中だから」

食蜂「慣れてないことを突然行なったら疲れるでしょ？」

初春「だから、休憩を挟むんですね！」

佐天「そんなとこだよー」

食蜂「初春さんの能力はちょっと特殊だから、私たちじゃあどうしよもないの…ごめんね」

初春「いえ…別に大丈夫ですよ」

佐天「でも、このメンバーでいると楽しいですね」

食蜂「でしょ？」

初春「ですね」

佐天「ここにいる全員で同じ家に住んだら毎日が面白そうだな」

食蜂「私は、当麻さんに永久就職…」ゴニョゴニョ

初春「食蜂さん？どうしました？」

食蜂「な、なんでもないわ／＼／」

「>おーい土御門たちの模擬戦が始まるぜ」

食蜂「今行きます！……！」ダッ

佐天「反応早いな」

初春「佐天さん！私たちも行きましょう！」

大和「只今より白井黒子VS土御門元春による模擬戦を始めます！」

黒子「よろしく願いますの」

土御門「よろしくだぜい」

大和「それではルール説明を始める」

- 1, 白井黒子は土御門元春本人を空間移動させてはならない
- 2, 両者への頭を狙った攻撃は一切禁ずる
- 3, 飛び道具並びに武器の使用も禁ずる
- 4, 制限時間は10分。先に地面に膝をつけたほうが負けとする

大和「把握したな？」

土御門「大丈夫だにゃー」

黒子「問題ありませんの」

初春「どっちが勝つんでしょうか…」

佐天「土御門さー！ーん！頑張ってくださいー！いー！！」

初春「白井さん！頑張ってくださいよ？でないと仕事を押し付けちゃいますよー！！」

食蜂「半分に別れたわね…一方通行さんはどっちが勝つと思いますか？」

一方通行「」スヤスヤ

食蜂「なぜこのタイミングで寝ることが出来るんでしょうか」

上条『今回、白井黒子VS土御門元春の戦いをリピートしていくのは、わたくし実況の上条と』

食蜂『解説の食蜂でお送りいたします』

上条『さあ、残り30秒弱で開戦ですね!』

食蜂『そうですねー…白井選手には空間移動という武器がありますが、土御門選手はなんにも持っていない!とゆう状況です』

上条『初めて彼を見る人は、圧倒的に土御門の方が不利だと思いますますが彼の身体能力を侮ってはいけませんねー』

食蜂『おーっと大和審判が腕をあげました!』

大和『準備はいいな?……開始!!!』

黒子『先手必勝ですのっ!』シュンッ

土御門『後ろか!』バッ

上条『おーっと土御門選手のカンは当たっていたー!!』

食蜂『先ほどから大和さんと模擬戦を続けているからでしょうか?カンの鋭い土御門選手です!』

黒子「!？」

土御門「そこだ！」ブンッ

黒子「甘いですよッ！」シュンッ

上条『あーっと土御門選手のパンチを空間移動でよけた!』

食蜂『よくよくれましたね、でもあんなに序盤からとぼして大丈夫なんですか』

上条『土御門選手は体力が多いから長期戦には期待できないですからね』

食蜂『早めに終わらせようという作戦なんですか』

上条『おそらくその通りでしょう』

黒子「（なぜわたくしが後ろに飛ぶとわかったんでしょうか…）」

土御門「どうした？もうおしまいかな？」

大和「（土御門のヤツ真剣モードだな…）」

黒子「まだ…ですのッ！」シュンッ

土御門「！」ブンッ

黒子「ここですのッ！」ビュンッ

土御門「ぐッ！」バシィ

上条『白井選手のパンチをどうにかして受け止めた！！！！』

食蜂『あと1秒反応が遅かったら脇腹に直撃してましたね』

上条『さあ、ここからどう動くのか！』

食蜂『一旦CM入りまーす☆』

上条『いや、入らないから』

食蜂『ナイスツツコミです!』

土御門「あっぶねーあっぶねー…（もうちょっとで直撃ぜよ…もうちょっと気を引き締めるか）」ヒヤヒヤ

黒子「（今の反応速度は普通の人じゃありえない速度ですよ…）」

土御門「もうおしまいかな?」

黒子「まだですよ!!!」ダッ

土御門「（突っ込んできた!?何を考えてる）」

黒子「はあああああああ!!!」

上条『白井選手血迷ったか!?!』

食蜂『相手に対して真っすぐに突っ込んでいくなんて…』

土御門「（カウンターで沈めるぜよ!）」ブンッ

黒子「ニヤッ

土御門「消えたッ!? 一体どこへ」キョロキョロ

黒子「ここですよッ!」ガスッ

上条『ここで白井選手の全力ドロップキックが土御門選手の脇腹を直撃!』

食蜂『これは痛い!!!!』

土御門「あ…甘いのは…白井のほう…ぜ…ぜ…よ」

黒子「わたくしの足を掴んでッ!?!」

土御門「うおおおおおおあああああああああ」ブンッ

上条『なんと白井選手の足を掴んでいた〜〜』

食蜂『そして、白井選手を投げ飛ばしたあああああ』

上条『土御門選手は体を鍛えていますからね〜』

黒子「あ…膝を……」

大和「ゲームセット！勝者土御門元春！！」

土御門「っしやあああああああああああああ」

上条『いい勝負でしたねー』

食蜂『その通りですねー』

上条『では、またいつかお会いしましょう』

食蜂『この放送は一方通行の提供でお送りしました』

一方通行「あア？」

佐天「土御門さん！おめでとうございます！」

土御門「これでちよつとは佐天ちゃんに希望を見せることができたにゃー」

佐天「ちよつとじゃありません！凄くです！」ガシッ

上条「あゝあゝ手まで握っちゃって…」

大和「おいおいフラグ建設か？」

一方通行「ここは一発かましてやるかア」

上条「何をする気だ？」

一方通行「こオするんだよッ！！」ビュンッ

一方通行が腕を振った直後、佐天が土御門に抱きついた…

実際は後ろから風が吹いて彼女を押しただけである

佐天「きゃっ！」グラッ

土御門「おっと」キャッチ

佐天「あ…土御門さん…／／／」

土御門「大丈夫かじゃー？（ち…近いぜよ）」ドキドキ

大和「おいおい…いい感じのムードになってんじゃねーか」ヒソヒソ

一方通行「だなぁ…」ヒソヒソ

上条「たしかにな…」ヒソヒソ

黒子「パネエですの」ヒソヒソ

初春「佐天さん…お幸せに」ヒソヒソ

大和「うおっ！？いつのまに後ろに！？」

黒子「今さっき飛んできましたの」

初春「それにしてもいい感じのムードですね」

上条「夏祭りの日にあいつらをわざと迷子にしてやろうか？」

大和「2人つきりになるな」

一方通行「ここには空間移動できる人間が3人いるんだ…余裕だろ」

大和「賛成だな」

上条「夏り当日、女の子全員に浴衣を着せるか？」

初春「私持ってます!」

黒子「わたくしも持ってますの」

初春「確か、佐天さんも持ってるはずですよ」

上条「じゃあ買う必要があるのは最愛だけだな」

大和「俺たちはどうするよ?」

一方通行「私服でいいんじゃないのか?」

上条「祭りは明日だ…集合はどうする?」

初春「祭り開始は…たしか…夕方の…6時?」

黒子「6時30分ですの」

大和「常盤台のお嬢様は大丈夫なのかよ」

食蜂「ルームメイトにどうにかして誤魔化してもらいます」

黒子「わたくしもですの」

上条「じゃあ問題ないな」

大和「じゃあ6時ぐらいに俺達の寮の近くの公園集合でいいか？」

初春「私…場所知らないんです」

黒子「じゃあわたくしが初春の部屋まで迎えにいきますの」

初春「よろしくお願いしますね」

食蜂「じゃあ、女の子全員浴衣を着ること！」

佐天「浴衣ですか？」

大和「うおっ！デジャヴー！」

土御門「かみやん達が仲良く話してるから気がつかないただけだよ」

一方通行「ま…まア、俺は気がついていただけだなア」

大和「目が泳いでるぜ」

初春「忘れてました！…私たち絹旗さんと一緒に行動するんです」

大和「どうするよ…あいつも呼んで大人数で行くか？」

佐天「大人数の方が楽しそうなんで、絹旗さんも呼んで皆で行きましよう！」

初春「『明日、絹旗さんのお兄さん達も誘って行くことにしました。集合場所は上条さんの寮の近くの公園になりました』っと」メルメル

食蜂「行動が早いわね」

上条「だな」

— 3分後

初春「絹旗さん、返信遅いですね…いつもなら2分以内に返ってくるんですが」

大和「そりゃそうだろ」

佐天「どうゆう意味ですか？」

一方通行「あいつは旧友に合いに行ってンだァ」

上条「つまり、返信する余裕がないってこと」

初春「なるほど…」

食蜂「もうそろそろこの施設から出たほうがよさそうじゃない？」

土御門「確かにゃー…」

大和「土御門：それ、文法的に微妙におかしくないか？」

一方通行「とつとと出るぞォ」

上条「今からどうするよ」

一方通行「俺はあのガキを迎えに行かねェとなンねェ」

黒子「わたくしは初春と共に177支部に戻らないといけませんの」

佐天「私もついていくねー」

食蜂「私は当麻さんと一緒に行きます」

大和「りょーかいだ」

食蜂「それじゃあ、また明日ね」

上条「じゃーなー」

佐天「今日はありがとうございました!...土御門さん!また明日です」

初春「おつかれさまでした」

黒子「今日はありがとうございましたの」

大和「じゃーなー」ノシ

一方通行「ンじゃあ俺達も行くかア」

上条「そうだな」

そして彼らは施設から出ていった

——カエル病院

上条「暑かった...」

大和「打ち止めちゃんはどこだ？」

冥土「君たち…やっと来んだね」

上条「先生！」

冥土「あっちの病室で彼女は待ってるね」

食蜂「それじゃあ行きましょ」

ガラガラ

一方通行「入るぜエ」

打ち止め「貴方が一方通行なの？ ってミサカはミサカは訪ねてみた
り」

一方通行「あア…」

上条「小さいな」

大和「確かに小さいな」

土御門「小さいぜよ」

食蜂「あなたが打ち止めさんね？」

打ち止め「そうだよってミサカはミサカは返事をしてみたり！」

00001「お久しぶりですみなさん」

00002「久しぶりなのさ」

00003「本当にうちの上司はチビっ子だよね」

打ち止め「チビとはなんだ！ってミサカはミサカは天罰を与えてみたりい！！」

00003「チビのくせに何ができるってんだあb b b b b b
b b」

00001「これがいつもの光景なんです」

00002「00003号は口が軽いのさ…だからいつもこうやって罰則を与えられてるってわけ」

上条「なるほど…日本の縦社会のわかりやすい見本だな」

大和「打ち止めちゃんは俺達のことを知ってるのか？」

打ち止め「あなたたちのことはMNWで把握済みですってミサカはミサカは報告してみたり」

食蜂「その独特な口調はどうして？」

打ち止め「クセなんだよってミサカはミサカは答えてみたり」

00003「このチビはバカだからこうゆう話し方しかできないんだぜ」

打ち止め「もう許さないよ！」

00003「チーン

00002「あ…死んだ」

大和「それにしてもこのアホ毛は面白いな」ニギニギ

打ち止め「掴まないでってミサカはミサカはああああああ」ジタバタ

食蜂「大和さん…打ち止めちゃんが可哀想ですよ」ハア

大和「わーったよ…ごめんな？打ち止め」ナデナデ

打ち止め「この罪は重いんだからねってミサカはミサカは忠告してみる」

冥土「もうそろそろ連れて行って欲しいんだね？」

上条「んじゃー帰るか」

00001「皆さん、最終信号をよろしくお願いします」

00002「ピンチになったらミサカ達を頼っても構わないからね？」

00003「……またね」

冥土「表にタクシーを2台呼んでいるからそれで帰って構わないよ」

上条「じゃあお言葉に甘えて」

一方通行「行くぞオ」

00001, 2, 3「」「さようなら」「」ノシ

——とある寮の廊下

打ち止め「ここがあなたのお部屋？ってミサカはミサカは訪ねてみる」

ガチャ

一方通行「（ベッドが増えてやがる…？）」

打ち止め「おおーベッドが2つあるよってミサカはミサカは驚いてみたり」

一方通行はベッドの上に置いてあった紙を手にとった

一方通行「（君へのプレゼント……byアレイスターだど！？）」

打ち止め「どっちがあなたのおベッドなのってミサカはミサカは聞いてみる」

一方通行「左だ」

打ち止め「お部屋探索だーってミサカはミサカは探検してみたり！」

P i r r r r

一方通行『当麻か』

上条『どうした？』

一方通行『アレイスターの野郎からプレゼントが届いてんだが、おまえは何か知らないか？』

上条『ベッドだろ？俺が頼んでおいたんだ』

一方通行『やっぱりてめェか…』

上条『まあ夜だからあまり騒がないようにな』

一方通行『わかってらァ』

上条『じゃあな』プツッ

ツー…ツー…ツー

一方通行「打ち止めア！飯だ…そこに座れ」

打ち止め「はい」

そして、一方通行に初めて守るべき人が出来たのであった…

9月03日(土) (後書き)

ついに打ち止め登場！

この子だけは語尾を消しません！

さあ明日は夏祭りです

佐天がすぐに能力を使えるようになったのは自分だけの現実が未発達であったためであり、

一方通行がそこを補強したので能力が使えるようになったと
思ってください

9月04日(日) (前書き)

過去最長の長さになっています。

祭りが終わったら、あるイベントが…

キャラ崩壊者続出です

9月04日(日)

——とある寮

絹旗「お兄ちゃん！起きてください！」ユサユサ

上条「あーうん…起きてるぞ…多分」

絹旗「朝ごはん抜きですね…」

上条「それだけはやめてください！」ガバッ

絹旗「じゃあ顔洗って来てくださいね！その間に準備しますから」

上条「うーい」

絹旗「……………準備完了！」

上条「洗ってきたぞ」

絹旗「今日はメロンパンです」

上条「早めに食べて、浴衣買いに行くぞ」モグモグ

絹旗「超了解です！」パクパク

ピンポーン

上条「げえ…もう来やがった」

絹旗「誰でしょうか？」

上条「一方通行だろうさ」

絹旗「入っても超構いませんよー！」

＞入っても超構いませんよー

一方通行「入るぞ」ガチャ

打ち止め「おはようございますってミサカはミサカは朝の挨拶を試みる」

上条「おはよー」モグモグ

絹旗「小さい…超電磁砲？」

一方通行「このガキも妹達の1人だ」

絹旗「では、何で一方通行さんと超一緒に住んでるんですか？」
クパク

上条「カエル先生が押し付けただけだ」モグモグ

一方通行「そんなところだア」

打ち止め「打ち止めだよ！^{ラストオーダー}ってミサカはミサカは自己紹介してみたり」

絹旗「絹旗最愛です。超よろしくお願いします」パクパク

上条「俺達が食べ終わったら浴衣売ってる店に行くぞー」モグモグ

一方通行「一応場所は調べておいた」ゴソゴソ

つ「第16学区マップアップ」

上条「なにそれ？」モグモグ

一方通行「16学区にある店の紹介をしている本だ」

上条「ネーミングセンスダサイな」モグモグ

絹旗「ですね」パクパク

上条「うっし！俺が皿を洗つとくから最愛は準備でもしといてくれ」

絹旗「超了解です」トテトテ

上条「明日からさ学校始まるけど、打ち止めはどうするんだよ」

一方通行「あ…やべェな」

打ち止め「あなたが学校に行っちゃうとミサカは一人になるんですよ？ってミサカはミサカは落ち込んでみる」

上条「打ち止めを学校に行かせるのはちょっと厳しいかもな」

打ち止め「どうしてなのってミサカはミサカは訪ねてみたり」

一方通行「オマエはIDを持ってないだろオが…しかも身分証明とかされたらどオするつもりだ」

上条「クローン製造は国際法違反だからな…」

一方通行「とりあえずだ：一旦は俺が学校に行ってるカエル病院に行かせる」

上条「歩かせるつもりか!？」

一方通行「バカかてめエは：タクシーを呼ぶんだよ」

打ち止め「カエル病院って下位個体のいるところでしょ? ってミサカはミサカは訪ねてみる」

上条「その通りだ」

一方通行「一旦はカエル病院で、そのあとはその時決めればいいだろオ」

上条「うっし!俺も着替えて出発するかねー」

第16学区

上条「ちらほらと浴衣を買ってる学生がいるな」

打ち止め「うおおお人がいっぱいいるよ！ってミサカはミサカははしゃいでみる」

一方通行「帽子だけは落とさないでくれよオ？」

上条「えーっと…あの店か？」

絹旗「らしい…ですね」

一方通行「入るぞ」

カランカラン

青ピ「いらっしゃいませ〜♪」

上条「なぜてめェがここにいる…」

一方通行「パン屋はどォしたんだよ」

青ピ「土日はここでバイトしてんねん」

上条「なんで浴衣専門店なんだよ」

青ピ「可愛い子がいっぱい来るからや」キリッ

一方通行「店長出てこい!!」

店長「なんででしょうか？」

一方通行「チェンジだ」

店長「了解しました。青ピ…君は下がりなさい」

青ピ「そんな…その小さいワンピースの子がああああああ」

上条「せめて女の店員がいいよな」

店員（女）「お待たせいたしました」

一方通行「コイツらのサイズを図って、好きな浴衣を選ばせろ」

店員「お支払い金額の限度は…」

つ「ブラックカード」 ↑ 一方通行

店員「（ブラック！？）……かしこまりました」 ペコッ

一方通行「よろしく頼む」

店員「それではお客様…こちらです」

絹旗「それでは行ってきますね」

打ち止め「いってきまーすってミサカはミサカは…」

一方通行「絹旗のガキも俺が出してやる」

上条「え…俺が出すから問題ないって」

一方通行「うるせエな…出すって言ってんだから素直に従いやがれ
エ」

上条「わーったよ…ありがたいな一方通行」

ドタドタ

青ピ「あのワンピの子はどこへ!？」

一方通行「おらァ!!」メキィ

上条「あーあ…能力使用のアイアンクローは痛いな」

青ピ「チーン

一方通行「店長出てこい!!」

店長「申し訳ありません」ペコペコ

一方通行「それを持って行け」

店長「申し訳ありません」ズルズル

上条「……静かになったな」

一方通行「だな」

——20分後

絹旗「超終わりました！」

打ち止め「終わったよあなたーってミサカはミサカは飛びついてみた…り？」

上条「こいつ寝てるよ」

一方通行「」スヤスヤ

打ち止め「起きてーってミサカはミサカは叫んでみる！」

一方通行「ン…」

上条「こいつらも終わったってよ」

絹旗「もうお昼なので、一緒にご飯を超食べに行きましょう」

打ち止め「ミサカも行くってミサカはミサカはアピールしてみたり」

上条「じゃあ行こうか」

上条達が家を出発して数時間後

大和「さあ土御門くん…今日は女子中学生3人に囲まれますぜ」

土御門「天国だにゃー…もう悔いはないぜよ」

大和「ミサキチは夜まで用事があるって言ってたよな」

土御門「やっぱり常盤台のエースは忙しいんですたい」

大和「それじゃ、お嬢達が待ってる場所まで急いで行きますかね…」

土御門「にゃー」

――20分後

佐天「土御門さーん！ここですここー！」フリフリ

大和「おーおー佐天ちゃんが手を振ってるぜ…返してやれよ」

土御門「にゃー」フリフリ

初春「おはようございます」

黒子「おはようございますの」

大和「おはよー」

佐天「おはようございます！」

土御門「おはようだにゃー」

初春「私たちの買い物に付き合っていたいてありがとうございます」

大和「いいんだよ…夕方まで暇だったしな」

黒子「上条さん達はいないんですの？」

土御門「かみやん達は浴衣を買いに行ってるぜよ」

佐天「なるほど…」

大和「んで、俺たちは何処に向かってるわけ？」

初春「セブンスミストです！」

大和「えーっと…確か服屋だったっけ？」

黒子「その通りですの」

佐天「あのーもし良かったら、1つだけでも土御門さんに服を選んで欲しいんですけど…」

土御門「え…っと…まじですか？」

佐天「お願いします！」

大和「やっべーよ…なんだよあの空間」ヒソヒソ

初春「佐天さん…積極的ですね」ヒソヒソ

黒子「いい感じですよ」ヒソヒソ

初春「つ…着きましたよ！」

佐天「じゃあお洋服売り場へレッツゴー！」

初春「あー！待ってくださいよー」

黒子「焦らなくても商品は逃げませんの」

大和「それじゃ…俺たちも行くか」

土御門「りょうかいだにゃー」

セブンスミストの中

初春「まずは…パジャマですね」

佐天「そうだねー」

黒子「常盤台で唯一制服以外で着れる時が就寝の時だけですの…気合い入れて買い物に集中しますわ!!!!」

大和「そって男物はあるのか？」

初春「一応あるそうですよ……ですが、男物売り場は狭いですよ」

大和「俺と土御門はそこにいるからパジャマ買い終わったら呼んでくれな」

土御門「それじゃあまた後だにゃー」

初春「それで…佐天さん！」クワッ

佐天「な…なに？どーしたの初春」

初春「佐天さんは、土御門さんのことが好きなんですね！？」

黒子「ストレートに聞きますのね…」

佐天「え…確かに…私は…／／／」

初春「佐天さんに言っておきますけど、周りの皆は気がついてましたよ」

黒子「バレバレですよ」

佐天「ええええええええ！？そんなに派手なことしたっけなあ…？」

初春「昨日抱きついていたじゃないですか」

佐天「あれは急に突風が吹いてきてね…」

黒子「たとえば風でも、顔は真っ赤でしたの」

佐天「は…早く買い物を済ませて土御門さん達のところに行きましょー！ー」

初春「そんなに会いたいんですか」ニヤニヤ

黒子「佐天さん…積極的ですよ」ニヤニヤ

佐天「な…早く買い物しましょう／＼／＼」

初春「はーい」

黒子「……お！これは最高の肌触りですよ！」

佐天「どれですか？」

初春 「これはすごいですね…」

黒子 「これに決定ですの！……お会計を済ませてきますの」

佐天 「私たちもこれにしない？」

初春 「お揃いですね！」

佐天 「そんなところ」

初春 「白井さん！待ってくださいよー」

佐天 「あー！初春待ってー」

黒子 「走らなくてもわたくしは逃げませんの」

初春 「もう買ったんですね」

佐天 「私達もすぐに買うんで待っててください」

＞待ってくださいよー

大和「お？もうそろそろ買い終わる頃かな？」

土御門「行ってみるぜよ」

大和「いきなりだけど、お前って好きな人いるの？」

土御門「な…いきなりどうしたんだにゃー!？」

大和「答えてくれよー」

土御門「そりゃ…まあ…」 チラッ

大和「(やっぱりね……お前ら両想いか)」

土御門「は…早く行くぜよ！」

大和「はいはい…（あーあ…どうすつかね）」

黒子「大和さん！こちらは買い終わりましたの」

初春「私も買うものはもうないですよー」ニヤニヤ

黒子「うゝいゝはゝるうゝ？」ブチッブチッ

初春「あ…あああああ…お花さんを引っ張らないでくださいよ」

大和「はあ…どうすつかねー」

佐天「どうかしたんですか？」

大和「ん？…いや、なんでもないぜ？（お前らのことだっつーの！）」

初春「大和さん？どうかしたんですか？」ヒソヒソ

大和「いや…涙子ちゃんたちのことなんだけど…」ヒソヒソ

黒子「佐天さんはお洋服を選んで貰うお約束があるので？」

佐天「あ…そういえばそうでした！」

土御門「あれは冗談じゃなかったのかにゃー!？」

佐天「土御門さん!行きましょう!」グイッ

佐天は土御門の腕を引っ張って洋服入り場へ走っていった

初春「佐天さん…」

＞初春達も早く来てねー

大和「はあ…あれで付き合っていないんだぜ？」

黒子「他人から見るとカップルにしか見えませんの」

初春「土御門さんは佐天さんのことどう思ってるんでしょう?」

黒子「うーむ…可愛い後輩…ですか?」

大和「いや、あいつらは両思いだな」

初春「どうしてわかるんですか?」

大和「さっき土御門の野郎に聞いたのさ…誰が好きなんだってな」

黒子「そしたら佐天さんの名前が出てきた…」

大和「名前は言っていないけど、目線はモロ涙子ちゃんだったぜ」

初春「出会ってまだ3日ですよ!?!」

黒子「出会って2週間で結婚するカップルだっていますの」

大和「すごいよな…」

初春「今日の祭りの最後には大花火大会があります！人気の無い場所を佐天さんに教えておいてあげましょう」

大和「いいなそれ」

黒子「佐天さんが正直になったところでわたくし達が突入するんですのね！？」

大和「いいねえ！ワクワクしてきたぜ！！」

初春「一応、作戦はこうですね」カチカチ

大和「携帯？」

初春「見てください」

- 1, 花火を見るのに適した人気の少ない場所を教える
- 2, そこに空間移動で全員飛ばすことにするが
- 3, 土御門さんと佐天さんのみ飛ばす
- 4, こっそり後ろから見守る
- 5, いい感じのムードになると思う。

6、ナイスタイミングで突入する

大和「風紀委員が率先して覗きとかしてもいいのかよ？」

初春「これは友達を見守ってるだけですよ？」

黒子「初春がこうなったら止まりませんの」

大和「じゃあそれを土御門達以外の連中に送信しとけ」

初春「了解しました！」

黒子「本当にうまくいけばいいのですが…」

大和「両想いの奴等ほど簡単に繋がるもんだぜ？」

初春「当たり前ですよ…」

黒子「では、今のうちに場所を探しておきますの」

初春「私がやりますよー」カタカタ

大和「前から思ってたんだけど…飾利ちゃんってパソコン得意なんだね」

黒子「得意の領域から圧倒的に足を踏み外してますの」

初春「心配するな…自覚はある」キリッ

大和「どうしたの!？」

初春「いやーネットに落ちてた迷言集のうちの1つなんですよ…使ってみたくなっちゃって」カタカタ

大和「迷言ね…」

黒子「確かにちょっとおかしい文ですの」

初春「…………あ!こことかどうでしょうか?」

大和「へえーいいんじゃないの？」

黒子「そこで大丈夫ですの」

初春「……………えーっと…ここは基本的に人はあまり来ないようですね」

黒子「また警備員のサーバーを覗いてるんですの？」　ハア

大和「すげーなーハッキングかよ」

初春「こんなの朝飯前ですよ」　エッヘン

黒子「初春が風紀委員で助かりましたの」

大和「飾利ちゃんほどの人が敵に回ったら情報戦で勝てる奴いないんじゃないの？」

初春「負ける気はしませんね！」

黒子「じゃあ、そこで決定ですの」

大和「うまくいけばいいんだけどな」

>初春<

初春「あ…戻ってきましたね」

佐天「遅いから戻ってきたぞ」

初春「ごめんなさい！話が盛り上がってしまっ

大和「そんなとこだ」

土御門「もうこんな時間ぜよ」

時計>16;47分ダヨ！

初春「私たちは浴衣を着ないといけないんで、先に帰ってもよろしいですか？」

大和「そっか！浴衣着ないといけないんだった！」

黒子「別に強制って訳じゃないんですの」

佐天「それでも着れる時に着ないとね」

初春「とゆう訳で、先に帰りますね」

黒子「失礼しますの」

彼女達は浴衣に着替えるために一足先に帰っていった
土御門達は暇になったので上条の部屋に行くことにした

そのころ

上条「てかさ、打ち止めはちょっとでも変装しないとやばいよな？」

一方通行「確かになア…」

絹旗「ならエクステとかどうでしょう」

上条「エクステ？」

一方通行「なんだそりゃア」

絹旗「あれですよ！髪に人工の髪の毛を付けるやつです」

上条「あーあれか…」

一方通行「ならそのエクステとかいうやつを買ってきてくれねえか？」

打ち止め「ミサカも行くの？ってミサカはミサカは訪ねてみたり」

絹旗「いや、打ち止めちゃんは今なくても超大丈夫です…が、せめて後ろ髪だけでも写メ撮らせて貰わないと髪の色がわからないんです」

上条「じゃあ撮ってもらえ」

打ち止め「はーいってミサカはミサカは回れ右!!」

絹旗「…」パシヤ

上条「それじゃあ頼んだぞ」

絹旗「それでは超行ってきます」ボタン

一方通行「それじゃあ浴衣を着させるかア…」

上条「打ち止めは一応浴衣の着方を知ってるんだよね？」

打ち止め「一応学習装置テストメントで知ってるよってミサカはミサカは報告してる」

一方通行「じゃあ最初は1人で着てみる」

打ち止め「はーい」トテトテ

上条「そういえばさ、初春ちゃんから送られてきたメール見たか？」

一方通行「あア…土御門と佐天が熱愛ってやつか」

上条「どうするよ…手伝う？」

一方通行「2人つきりになるとこまではなア…」

上条「それで、いいところで乱入か？」ニヤニヤ

一方通行「あア…当たり前エだろ」

上条「それにしても早いよな」

一方通行「出会って3日…ぐらいかア？」

上条「それぐらいだな」

——10分後——

＞できたよ！ってミサカはミサカは

上条「うまく出来たか？」

一方通行「ン……まあまあだな」

上条「いや、この年でここまで出来るのはすごいとおもうぜ」

打ち止め「でも、ミサカが原因でお姉様に迷惑かけないかな？ ってミサカはミサカは不安になってみたり……」

上条「バレないように、最愛がエクステを買ってきてくれるんだ」

一方通行「髪の毛を伸ばせば問題ないだろ」

上条「それでも打ち止めが不安なら、前髪をオールバックにするか？」

打ち止め「一応そうしておくってミサカはミサカは前髪を上げてみたり」

上条「おーっし……ピンで留めるからな」

打ち止め「……………これで大丈夫かな？　ってミサカはミサカは訪ねてみる」

上条「あとは、後ろ髪をエクステで伸ばしたら完璧だな」

一方通行「あア…おそらく別人に見えるだろオヨ」

打ち止め「なら安心だね！　ってミサカはミサカははしゃいでみる！　」

一方通行「ちったア静かにしやがれ」

上条「ここは一応学生寮だからさ、もうちょっと静かにしようかな？　打ち止め」

打ち止め「あ…ごめんなさいってミサカはミサカは口に手を当ててみる」

しばらくして

ガチャ

絹旗「超帰ってきました」

上条「おっかえりー」

一方通行「そのなんちゃらってやつは見つかったのかア？」

絹旗「エクステですよ…まあ、商品は超見つけました」

打ち止め「付けてみるーってミサカはミサカはお姉ちゃんにダッシユしてみる！」ダッ

絹旗「止まらないと超渡しませんよ？」

打ち止め「う…それは嫌かもってミサカはミサカは止まってみたり」

上条「髪の色は合ってるのか？」

絹旗「私の目に超ミスはないと思いますが…」ガサゴソ

打ち止め「うー同じ色だ！ってミサカはミサカは驚いてみる」

絹旗「さ、超後ろを向いてください」

上条「これでバレル心配はなくなったな」

一方通行「あア…」

絹旗「……はい！ちょうどいいですね」

打ち止め「ぴったりかな？ってミサカはミサカは訪ねてみる」

上条「結構別人だな」

絹旗「超私の活躍ですね」

ピンポン

>当麻ーいるかー？

一方通行「大和か？」

上条「入っ
ていいぞー
ー！！！！」

大和「おっ
じゃまっし
まー……っ
す！？」

土御門「お
じゃまする
ぜ……よ？」

大和「おい
おいその小
さい子は誰
だよ！？」

土御門「まさ
か…打ち止
めなのかに
ゃー？」

打ち止め「そ
うだよって
ミサカはミ
サカは暴露
してみる」

上条「俺達
の努力の塊
だ」

絹旗「結構
別人に見え
ますよね？」

大和「おそ
らく、一般
人は気がつ
かないだろ
うよ」

土御門「俺
達でもわか
らなかつた
んだから当
たり前ぜよ」

上条「よーっし！完璧だな！」

ピンポン

＞当麻さんいらっしゃいます？

上条「入っていいぞー！ー！ー！！！！！」

食蜂「お邪魔します」

打ち止め「お姉ちゃん！ミサカの変装は完璧でしょ？ってミサカはミサカは自慢してみる！」

食蜂「語尾がなかったら完璧なのにね…」クスクス

上条「語尾のことを忘れてたな…」

大和「それじゃあ、打ち止めは語尾を消して外を歩くように！」

打ち止め「わかったよ！ってミ…………大丈夫デス」

土御門「カタコトになってるにゃー」

打ち止め「もう大丈夫だよ！」

大和「合格だ！」

上条「今、17；58分だ…集合まであと10分弱か…」

大和「何するよ？」

一方通行「することがねえな」

土御門「なら、プログラムの最終チェックをしておくぜよ」

上条「えーっと…花火大会は午後21時開始か」チラッ

大和「2時間もあれば結構回れるな」コクッ

一方通行「まずは射的だ…今年もアレをやってやらア」

食蜂「一応、看板を確認してくださいね？」

大和「もうそろそろ出ようぜ」

時計＞18；02分ダヨ！

上条「じゃあ集合場所へレッツゴーだ」

一同「「「「おじゃましました」」」」

——公園

腕時計＞18；07分ダヨ！

黒子「遅れてすいませんのー」

初春「ごめんなさい！！」

佐天「ごめんなさい！そして、こんばんは！」

黒子「おや？その小さな子はどちら様ですか？」

一方通行「俺の知り合いだア…一旦俺が預かることになってる」

上条「いいやつだからみんな仲良くしてやってくれ」

佐天「名前を教えてくださいませんか？」

打ち止め「ミ…………私の名前は打ち止め^{ラストオーダー}って言うんだよ！」

初春「打ち止め…………？偽名か何かですか？」

一方通行「俺と同じだ…あまり追求はするんじゃないぞ」

佐天「じゃあ、能力の名前みたいなものなんですね！」

黒子「それ以上は聞きませんの」

初春「人の個人情報ですからね！」

大和「うっし！それじゃあ行くか！」

一同「「「「「「「「「「「おーーーーー！……！！！！！！」
「「「「「「「「「「」

—— 祭り会場

大和「まず！射的屋を襲撃、そのあと女の子の意見を最優先に行動します」

一方通行「射的屋に行けるンなら異論はねエぞ」

上条「んで、花火大会は俺たちが事前に見つけた秘密の場所に行く」

食蜂「そこは結構綺麗に見えるのよ?」

初春「じゃあそこに行きましょう」

大和「とりあえず、射的屋に行くぞ!!!」

一方通行「今年も看板が出てなかったらいいけどなア」

—— 射的屋

大和「おい、一方通行…あの射的屋の中にいる男の子…風力使いだな」

一方通行「あア…微妙に弾を押し戻してやがる」

絹旗「相手が能力使ってるんだったらこっちも能力を超使ってやりましようよ！」

佐天「さっきから何であんなにテンションが高いんです？」

食蜂「そういえば貴方たちは今年が初めてだったわね」

初春「何をするんですか？」

食蜂「一応周りに知られたらやばいから、能力で話すわね」

初佐黒「『はい』『はい』」

食蜂「彼らの言う「アレ」とは、飛んでいく弾に触れて弾を操ることによって弾の力量を底上げし、1列に並んでいる1番前の商品を押し飛ばし根こそぎ商品を獲得しよう！
という内容なのよ」

初春「それっていいんですか？」

黒子「本当はダメですの」

佐天『でも、店側が能力使ってるんだから別にいいんじゃないですか？』

食蜂『今回は許してもらえうでしょうね』

一方通行「ほら代金だ」

おっさん「へへっどうも（どうせ当たらないんだよ！風力使いつても便利だね）」

一方通行「うひゃっ…その程度の風に俺が負けるわけねえだろオがよ」ボソッ

大和「やっちまえ！！！！」

一方通行「発射！」ポンッ

そして、人差し指で弾に触れた直後

バコオツ！バコオツ！バコオオツ！

一方通行「一列全部もらっていくぜエ」

おっさん「おまえ！今、能力使ったろ！」

＞せこいぞー！

＞やり直せー

一方通行「じゃあよてめエらに聞くんが、ここの店で1つも商品が倒させてないのに気がついてないのかよ」

大和「当たるわけないのさ…おっさんの後ろに座ってるガキンチョが風を操って弾を押し戻してるからな」

風力使い（客）「あの白いのが言ってるのは本当だぜ？俺も風力使いのレベル4だからわかる」

＞な…

＞おっさん！どうゆうことか教えてもらおうか！

一方通行「（こちらへんで帰るとするか）…大和、あいつらのところへ帰るぞ」

大和「りょーかい」

初春「あ！帰ってきましたよ」

上条「屋台の前に人が群がってるけど何があったんだ？」

大和「店の中に風力使いを置いて、弾を押し戻していたんだ」

上条「んでお客さんたちがキレたってことか…：まあ、それはいいとして今からは女の子優先タイムだな」

大和「なんか奢ってやろーか？」

初春「まだ、夕食を食べてないんです」

上条「それは俺達も一緒さ」

佐天「だったら！焼きそばでも食べにいきませんか？」

土御門「賛成だにゃー」

打ち止め「ミサ………私も食べたい！」

大和「決定だな」

上条「それじゃあ席を取る係と、買いに行く係に分かれるために近くのやつとじゃんけんしてくれ、負けが買いに行くってことで」

一同「「「「「「「「「「じゃんけん…ほい！」「「「「「「「「「「

勝ち…一方通行、打ち止め、佐天、土御門、初春
負け…上条、食蜂、黒子、大和、絹旗

一方通行「あとは頼んだ」

上条「さ、買いに行こうか」

――
焼きそば屋

上条「ま、どうせ負けると思ってたけどな」

大和「相変わらず弱いよな」

絹旗「お兄ちゃんは超不幸ですから」

食蜂「それはいいとして、今日のメインプランの作戦をもう1度練り直したほうがいいんじゃないかしら」

上条「練り直す？」

食蜂「はい、土御門さん達に急に空間移動を頼むのはちょっと不自然過ぎませんか？」

黒子「その通りですの」

絹旗「それじゃあ超騙すしかないんじゃないですか？」

大和「でも、どうやって？」

黒子「あの2人に場所取りに行かせて、わたくしたちは食べ物などを買いに行くと嘘を言えばいいんですの」

上条「つまり2人を場所取り、ほかの8人を飲食物の買出しに行くと思わせておいて後ろからストーキングか」

大和「あー…そっちの方が良さそうだな」

食蜂「それで行きましょう！」

屋台のおっちゃん「ちよっとちよっと、兄ちゃんはいくつ買うの？」

上条「あ…10人分で」

おっちゃん「あいよ」

大和「1人2個持ってくれ」

おっちゃん「3500円な」

上条「ほい……3500円」

おっちゃん「確かに受け取ったぜ」

上条「それじゃあ行こうぜ」

＜まいどあり！

上条「えーっと…あいつらどこにいるんだ？」

絹旗「あ……超発見しました」トコトコ

食蜂「皆さん、場所取りご苦労さまです」

初春「いえいえ」

大和「早く食べようぜ！」

絹旗「超腹ペコです！」

上条「それでは！いっただっきまーす！」

一同「」「」「」「」「」「」「」「」「」「」

打ち止め「おいしいね！ってミ……………危ない危ない」パクパク

上条「美味しいなー」モグモグ

大和「もうちょっと濃いほうがいいな」モグモグ

食蜂「屋外で食事をするのも何ヶ月ぶりかしら…」パクパク

初春「これ食べ終わったらかき氷買いに行っていていいですか？」パク
パク

佐天「どうします？」パクパク

土御門「どっちでもいいにゃー」モグモグ

黒子「ではいきますの」パクパク

絹旗「私も超食べたいです」パクパク

「一同」「」「」「」「」「」「ごちそうさまでしたー」「」「」「」「」

かき氷屋

絹旗「あ……この頭にツーンって超くるのが……！」 キーン

佐天「夏の風物詩ですよー」

一方通行「買ってない奴はいンねエのか？」

初春「はい！まだ私が買ってないです」

一方通行「お前…何味が欲しい？」

初春「え…メロンですけど……」

一方通行「そこで見とけエ…ここの裏技を教えてやる」

佐天「裏技…ですか？」

食蜂「ああ…あれのことですね」ハア

初春「どんなことをするんですか？」

食蜂「店員の頭をよく見ておいてね………」ハア

佐天「はい……」

店員の兄ちゃん「いっらっしーい」

一方通行「メロン味を1つよこせ」

兄ちゃん「あいよ！」

店員の兄ちゃんがシロップをかけている最中、彼の後頭部に空気の塊があたった…

もちろん一方通行によって生み出された物であるが…

兄ちゃん「痛ッ！」ブシュッ

おっちゃん「おいおいシロップ出しすぎだろ」

兄ちゃん「白髪のアンちゃん、ごめんな」

一方通行「それでいいからよこせ」

おっちゃん「味が濃いいかもしれねーけど、味わって食ってくれよな」

一方通行はかき氷を受け取るとすぐさま皆の待っているとこまで帰っていった

一方通行「ほらよ…お望みの品だ」

初春「いいんですか…？」

一方通行「こんな甘いものは食わねエ主義なンでな」

初春「ありがとうございます！」

大和「でも、それはシロップかかりすぎだろ…」

初春「ん…でも、美味しいですよ」パクパク

佐天「あーーーーー！！！！もうそろそろ花火大会の時間ですよ！」

上条「だな…」

大和「それでさ、飾利ちゃんが人気の少ないベストな場所を見つけ
たらしいんだ…それで場所取りに2名、飲み物を買うに行くのが4
名、食物を買うに行くのが4名で分けたいんだ」

上条「俺と一方通行で飲み物買ってくるぜ」

食蜂「私も当麻さんに付いていきます!!!」

打ち止め「ミ……私も一方通行と行く! ってミ……ととととと危ない危ない」

上条「じゃあ、飲み物班! 出発!!!」

食蜂「ではお願いしますね」 チラッ

初春「はい」 コクッ

大和「じゃあ俺は食物だな」

黒子「大和さんが行くのであればわたくしも行きますの」

絹旗「私は超力持ちなので、物を運ぶのを超援護しますよ」

初春「私は待つのが嫌なので、食料班に付いていきます」

佐天「それじゃあ私は？」

初春「土御門さんと先に行っておいてください」

大和「土御門……素直になれよ？」ヒソヒソ

土御門「一体何を……」ヒソヒソ

大和「食料班出発！」

絹旗「おーーーーー」

初春「佐天さん……素直になってくださいね」ヒソヒソ

佐天「（初春？一体何を……？）」

初春「いってきまーす」

土御門「行ってしまったぜよ」

佐天「初春から場所は教えて貰ったので、先に行っておきましょう」

土御門「了解ですたい」

――― 集合場所

佐天「皆さん遅いですねー」

土御門「だにゃー」

ヒューー………ドンッ！！！！

佐天「あーあ…始まっちゃったよ…」

土御門「かみやん達遅いにゃー」

佐天「ですねー………それにしても綺麗ですねー」チラッ

土御門「だにゃー……」

佐天「（土御門さんの横顔綺麗です…／＼／＼）」

土御門「（それにしても、大和の言っていた素直になれて……）」

佐天「（初春が言っていた…素直になれて！……当たって砕けて

もいい…勇気を振り絞れ！佐天涙子！」

土御門「（いったいどうゆうことなんだにゃー？）」

佐天「（みんなもないし、今しか…ないよね…）」

佐天は勇気を振り絞り、土御門の胸に飛び込んだ

土御門「ど…どうかし「土御門さん！」…なんだにゃー？」ドキドキ

佐天「急にこんなこと言って戸惑うかもしれませんが聞いてください！」

佐天は土御門から1歩ほど下がり、彼の顔をまっすぐに見て……

佐天「わ……私は土御門さん！あなたのことが……好きです／＼／」
ドキドキ

土御門「え……？え……？」

彼は状況判断に苦しんでいた

土御門「（え……いきなり抱きついてきて……告白！？）」

佐天「出会って3日しかたってませんが、あなたを好きになってしまったんです」

土御門「にゃー！？」

佐天「私じゃ釣り合いませんか？」ウルウル

土御門「（俺は…）」

土御門は覚悟を決め彼女の顔をまっすぐに見つめて……

土御門「お…俺なんかでよければ……よろしく…頼むぜよ」

佐天「あ……よろしくお願いしますっ！」ウルウル

佐天は嬉しさのあまり土御門に抱きついた

土御門「まさか自分が好意を向けていた子と付き合えるようになるとは…」

佐天「（土御門さん……私、今まで生きてきた中で1番幸せです…
／＼／」

彼らの抱擁は長く続いた…

抱擁が終わったとき彼女はあることに気がつくのであった

佐天「（あれ…？これってあのムードっぽくないかな？）」

佐天は覚悟を決め、土御門の方をまっすぐに見つめたあと…目を閉じたのであった

土御門「（にゃー！？…これはやらないと佐天の勇気を踏みにじることになるぜよ…）」

土御門は自分の唇を、彼女のピンク色に染まっている場所へ近づけ…

チュッ

佐天「（土御門さん…私嬉しいですよ／＼／＼）」ドキドキ

土御門「（佐天の唇柔らかいぜよ…／＼／＼）」ドキドキ

口づけの最中…

そこへ聞きなれた声が響いてきた

上条「暑い暑い…店員さん、ここ空調効きすぎてませんか？」

大和「お客さん…ここは屋外ですぜ」

佐天「な…なんでここに!？」

土御門「タイミングが良すぎるような気がするぜよ」

初春「当たり前ですよ!ずっと隠れて見てたんですから!」

佐天「え…っと…じゃあ、全て見られてたんですか!？」

大和「ばーっちり」

食蜂「見させてもらったわよ」クスクス

上条「まあ、何はともあれ…おめでとう!!!」

そして佐天の人生で1番幸せな時が、人生で1番恥ずかしく感じた時に変わってしまった

佐天「初春ひどいよー…」ウルウル

初春「いつものお返しってことにしておいてください」

土御門「いつからこの計画は進んでいたんだにゃー？」

上条「内緒だな」

大和「内緒だぜ」

初春「皆さん…もうそろそろ帰らないと怒られませんかね」

黒子「!!!!!! やばいのです…」

大和「常盤台のお嬢達は早めに帰ったほうがいいんじゃないか？」

上条「じゃあ、ついでに今日は解散するか!」

大和「明日から学校だしな」

食蜂「それじゃあ、解散ですね……おやすみなさい」

黒子「おやすみなさいですのー」

大和「さあ、お嬢達がお帰りになったから俺達も帰りましょうかね」

上条「だな」

一方通行「あア」

彼らが歩きだして10分

佐天「私たちはこっちなので」

初春「おやすみなさい」ノシ

土御門「おやすみだにゃー」

上条「おやすみー」

打ち止め「今日はあまり話さなかったよ！ってミサカはミサカは報告してみる」

上条「おう！お疲れ様」

大和「小さいのによく頑張ったな」ナデナデ

絹旗「でも、超眠たそうにしていますよ」

上条「じゃあ、俺の背中に乗ってもいいぜ」

打ち止め「ありがとーってミサカはミサカは……」

上条「こりゃ相当疲れてるな」

大和「ま、あとちょっとで寮につくから問題ないだろ」

絹旗「私が着替えるのを超手伝いますね」

一方通行「よろしく頼む」

――3分後

上条「さあ、着きましたぜ」

大和「じゃあ、おやすみ！」

上条「また明日な」

絹旗「お疲れ様です」

一方通行「ン」

上条「それじゃあ、打ち止めを置いたら俺は先に風呂に入ってるかな」

絹旗「超了解しました」

一方通行「着替えてる間は邪魔になりそだから、当麻の部屋にいるからなァ」

上条「りょーかい」

一方通行「それじゃあガキを頼んだ」

絹旗「任せてください」ボタン

上条「うっし！俺は風呂に入りますかね」

一方通行「テレビ借りるぞ」

上条「おう！」ボタン

一方通行「……………暇だなァ…」

——40分後——

絹旗「打ち止めちゃんの着替えには超疲れましたよ…」

上条「お疲れ様」

絹旗「それじゃあお風呂に超入ってきますね」トテトテ

上条「俺も疲れてるから、もう寝るな」

>超おやすみなさい!!!!

上条「おやすみ」

上条「(まさか、土御門と佐天ちゃんが付き合うことになるとはね
…)」

彼は驚きを隠せずにいた

上条「(明日はクラスメートに報告だな…)」

上条「（みんな……おやすみ）」 Z Z Z

土御門「いっくし………誰か俺の噂をしてるのかにゃー？」

土御門は今日のことを思い出し、にやけながら眠りについた…

9月04日(日) (後書き)

土御門と佐天を無理やり引っ付けてしまいました！
強引にやってしまいました…

出会って3日ですよ……早すぎですね

最後、一気に上条就寝までもっていつてしまいました
ちょっと急ぎ足になって申し訳ありません

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1346ba/>

とある仲良しの日常

2012年1月13日18時48分発行